PLAN INTERNATIONAL
Until we are all equal

Supported by
The Rockefeller Foundation

ユース・リーダーシップ・アカデミー

ジェンダーの視点に立った気候変動対策に向けて

成果報告書2025年

声をつなぎ活動の輪を広げる









要約

ユース・リーダーシップ・アカデミー(YLA)は、ユース、特にユース女性がジェンダーの視点に立った気候変動対策に有意義な形で参加することを今なお阻む壁をなくすため、Rockefeller財団の支援を得てプラン・インターナショナルによって立ち上げられた。5カ国(インド、インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナム)で実施された同プログラムでは、40人のユースアンバサダーを対象に、リーダーシップ能力、専門知識、アドボカシースキルの教育が行われ、各コミュニティで具体的な成果を生むためのシード資金が提供された。

18カ月の取り組みを通して、YLAは、気候変動とジェンダーに関する5つのモジュール講座、メンターとの5回の個別面談、シード助成金を活用した8つのユース主導型プロジェクト、さらに複数地域と世界規模でアドボカシー活動を行う機会等、内容の濃い学習体験を提供した。

こうした一つ一つの経験を通して、ユースアンバサダーらは自信とリーダーシップ、プロジェクト管理能力を高め、ジェンダーと気候変動の連関を理解する(表裏一体の社会的課題として捉える)ことができるようになった。

数値が示す同プログラムの優れた成果

87%

のユースアンバサダーが「自信が高まった」と報告(平均2.25ポイント上昇)

80%

のユースアンバサダーが「リーダーシップが高まった」と報告(平均1.87ポイント上昇)

87%

のユースアンバサダーが「プロジェクト管理が向上した」と報告(平均2.26ポイント上昇)

100%

のユースアンバサダーが「ジェンダーの視点に立った気候変動対策に関する専門知識が向上した」と報告(平均2.87ポイント上昇)

さらに、同プログラムはこれまで対象になりにくかった層へも幅広く働きかけ、プログラムおよびユース主導双方で行ったオンラインキャンペーンでは、2025年11月までに合計189万人のリーチ(認知)を達成し、(*報告書執筆時点では)2025年末までに地域目標の250万人を超えると見込まれている。対面では、女の子、社会的経済的に困難な状況下にあるユース、障害のある人びと、世帯主が女性の世帯を優先的に対象とし、6,100人超がユース主導のプロジェクトに直接参加した。

またYLAによってユースはアジア太平洋防災閣僚級会議(APMCDRR)、AsiaXchange、COP29、COP30等、気候変動対策に関する主な政策議論の場とつながることができ、ユースアンバサダーらは、災害リスク軽減(DRR)、気候変動に対するレジリエンス、ジェンダーインクルージョン(あらゆるジェンダーの人々が平等に尊重され参加できる環境づくり)に関する地域レベルの対話を働きかけることが可能になった。

全体として調査結果から、YLAが今後アジア太平洋地域でユースがリーダーシップを発揮していくための確固たる道筋を示せたことは明らかである。YLAが育んだ、思慮深く、専門的能力と影響力、そして自信にあふれた新たな世代のユースリーダーたちは今、それぞれのコミュニティでジェンダーの視点に立った気候変動対策を動かしつつある - そして、プログラム期間をはるかに越えた今も、YLAが起こした社会変化の波を広げつつある。

数値で見る成果

アジア全体ですすむユース主導のジェンダー公正な気候変動対策

目標対象者250万人の達成に向けた進捗

189万283人 (2025年11月)

75.60%

2025年12月までに目標達成の見込み

同プログラムのオンラインでの活動および応募者、イベント参加者、プロジェクト参加者の合計人数は、2025年11月時点で189万383人に達し、2025年12月までに250万人の目標を達成/上回る見込み。

採用過程と応募者の概要

同プログラムには予想を上回る261人の応募者が集まり、ユースがリーダーシップを発揮する機会を求める地域の声が大きいことを裏付けている。



ユースアンバサダー：40人

女性: 72.5%　　男性: 27.5%

5カ国



5カ国から採用された多様性のある40人のユースアンバサダーによって、女性の強いリーダーシップ(72.5%が女性)と疎外された集団(65%)の声を反映した変革が可能になる。

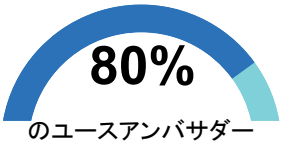
能力開発

5回のワークショップと5回のグループ・メンタリング(助言や手助けをしながら行う人材育成法)を重ねることで、アンバサダーらはリーダーシップ、自信、プロジェクト管理のスキルを高めた。

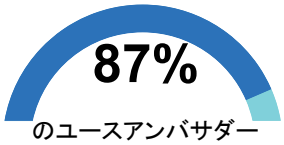
5回 のワークショップ　**5回** のグループ・メンタリング



のユースアンバサダーが「自信が高まった」と報告



のユースアンバサダーが「リーダーシップが高まった」と報告



のユースアンバサダーが「プロジェクト管理が向上した」と報告



のユースアンバサダーが「自己評価によるジェンダーの視点に立った気候変動対策に関する専門知識が向上した」と報告

シード助成金プロジェクトにより、教室での学びが、脆弱な集団への支援に重点を置いたコミュニティ主導の解決策として目に見える形になった。

8つ のシード助成金プロジェクト

6,100人を超す 直接的な参加者

- 女性が世帯主の世帯
- 女の子
- 障害のある人びと(PWD)
- 学生
- 現地コミュニティ

1万6,000ドル のシード助成金

アドボカシーと世界的規模での働きかけ

YLAは、ユースの声が現地の政策に影響を与え、気候変動に関する国際会議に意義のある形で参加するためのきわめて重要な場を提供した。

32人 のユースアンバサダーが、世界・地域レベルの気候変動関連会議に参加

- APMCDRR: フィリピン
- COP29: アゼルバイジャン
- COP30: ブラジル
- ユース・リーダーシップ・サミット: ジャカルタ
- AsiaXChange: タイ
- 地域人道パートナー週間(RHPW): タイ

目次

概要	03
用語集	06
はじめに	07
調査方法	19
インパクト効果(活動がもたらした社会的・経済的・環境的な変化)分析	23
プログラム活動とパートナーシップの事例	26
ユースのパワー(リーダーシップと自信)	32
ユースの無限の可能性(知識と実践)	41
ユースの上げる声(アドボカシーと働きかけ)	45
プロジェクト実施事例	52
結論と提言	85

用語集

APMCDRR(アジア太平洋防災閣僚級会議)
国連防災機関(UNDRR)が主催する隔年開催の地域会議。アジア太平洋地域の各国政府および政府間組織および関係者が一堂に会し、DRR戦略実施の加速化と協力の強化を目的としている。

気候正義
気候変動を単なる環境問題ではなく、倫理的・政治的問題として捉える概念。これは、(疎外されたコミュニティやユース女性等)気候変動への加担が最も少ない人びとが、その影響を最も深刻に被る場合が多いという認識に基づいている。

COP (締約国会議)
国連気候変動枠組条約の最高意思決定機関。世界の指導者が気候変動対策について交渉や合意形成を行う世界規模の気候変動サミットとして機能している。

ジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ(GTA)
女性の参加の実現に留まらないプログラム戦略であり、ジェンダー差別の根底にある社会規範と力関係、そしてジェンダー差別を生み続ける構造的な不平等に積極的に挑み、変革を図るもの。

MEL(モニタリング・評価・学習)
プログラム成果を追跡する際に使用されるプロセス。YLAでは、その制度を単なる説明責任の履行だけでなく、学習や順応的管理(モニタリング評価と検証によって随時見直しと修正を行いながら管理する手法)のためのツールとしても用いられた。

シード助成金
ユースアンバサダー・チームが、コミュニティ主導の気候変動対策プロジェクトに着手するために提供される少額の資金(約2,000ドル)。彼らは、これを活用してアイデアを試験的に実施し、具体的な成果を示すことができる。

YAP(ユース活動プラットフォーム)
ユースリーダーが、リソースを入手する、同世代の仲間とつながる、社会変革に向けたキャンペーンを展開する、ための拠点としてプラン・インターナショナルが運営する専用のオンラインプラットフォーム。

YLA
プラン・インターナショナルがRockefeller財団の支援を受けて、アジア5カ国のユースが能力開発や実践、アドボカシーを通してジェンダーの視点に立つ気候変動対策を主導する力を身につけることを目的として実施される18カ月の包括的プログラム。

YLS (ユース・リーダーシップ・サミット)
YLAプログラムの締めくくりとなるイベント。ジャカルタでユースアンバサダーが一堂に会し、コミュニティ主導の気候変動対策プロジェクトを紹介し、関係者や仲間と交流し、「行動の呼びかけ」を発表した。

ユースアンバサダー
インド、インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナムの代表として選出されたYLAプログラムの40人の参加者。YLAで自身のコミュニティでリーダーとなるための研修を受講した。

ユースのパワー
YLAの3つの柱の1つ。ユースがリーダーシップを発揮するために必要な自信や自己認識、リーダーシップスキルを高めることに焦点を当てている。

ユースの上げる声
YLAの3つの柱の1つ。ユースが政策に働きかけ、世論を動かすために必要なアドボカシーやコミュニケーションのスキルを身につけることに重点を置いている。

ユースの無限の可能性
YLAの3つの柱の1つ。ユースが有効な解決策を設計し、実施するために必要な専門知識と実践的な応用スキルを身につけることに重点を置いている。

はじめに

ユースのリーダーシップと気候変動対策に向けた土台づくり



1

根本的理由:

なぜジェンダーの視点に立つ気候変動対策が必要なのか



気候変動はジェンダーに中立ではなく、ジェンダー不平等を広げる要因であり、人権と持続可能な開発に対する直接的な脅威でもある。「その交差性は、ジェンダー平等に関する持続可能な開発目標(SDG)5と、気候変動対策に関するSDG13の達成にとって、重大な課題となっている」。

気候の非常事態(危機)下では、女性と女の子に偏ったリスクが及ぶ。気候関連の災害で強制避難した者の80%が女性と女の子で、気候関連での死亡率は男性の14倍に上る(UN Women、2022年; 国連開発計画、2021年)。その過酷な現実はアジア太平洋全域に存在し、2024年には2,400万人超が災害による避難を余儀なくされ、同地域で最も脆弱な女性と子どもに不均衡な影響が及んでいる(IDMCとIFRC(2024年/2025年))。

こうした脆弱性は、社会的役割や排除の構造とつながっている。気候に左右されやすいリソースに非常に依存した生活の中で、食料、水、燃料の入手は多くの場合女性が担う。そうした生活が崩れれば、女の子がジェンダーに基づく暴力を受け、早すぎる結婚を強制され、教育の機会を失うリスクは高まる。

女性たちは危機の矢面に立たされているにもかかわらず、今も、軽減策や適応策を策定する意思決定の場に、その姿はほとんどない。世界の気候ファイナンスの内、ジェンダー平等が組み込まれているのはわずか5%である(経済協力開発機構(OECD)、2022年)。この問題に取り組まなければ、人口の半分が解決策から取り残されることになり、各国が定める貢献(NDCs)を効果的に達成することは困難となる。

ユース格差:

なぜユースリーダーは今なお意思決定の場にいないのか

気候変動問題のリーダーとして、ユース世代、特にユース女性の台頭がすすんでいる。しかし、こうした世界的傾向をよそに、アジア太平洋地域は差し迫った問題に直面している。世界中でユースの動きが活発化するなかで、同地域では人口統計上の力と政治的発言力が非常に大きく乖離している。



代表制にみられるユースの格差

50%

アジア太平洋地域の人口の50%はユースだが、議席に占める割合は全体のわずか2.6%である(IPU、2023年)。

「私たちは形だけでなく、気候変動対策機関で(ユースが意見を述べられるよう)ユースに席を割り当てる制度化に向けて進む必要があります」

リソースとアクセスの不足

-1%

世界の気候ファイナンスで、ユース主導の取り組みに充てられているのは1%未満である(OECD、2023年)。

「より大きな社会的変化をもたらすには、ファイナンスの仕組みの中に、草の根組織が利用できるユースに特化した気候基金を設けなければいけません」

能力不足

76%

ユース女性活動家の76%が、メンタリングやリーダーシップ支援を受けていない(プラン・インターナショナル、2023年)。

「技術的スキルの提供や世代間ネットワークの構築を支援する、長期的なリーダー育成への投資が必要です」

YLAの存在理由:
リーダーシップを発揮できない現状を変える

YLAは、ユースの気候正義に対する関心が高い一方で彼らが力やリソース、スキルを身につける機会は限られているという現実とのギャップを埋めるために設けられた。特にユース女性は、ジェンダー規範や資金不足を背景に重なり合う様々な障壁に直面している。

私たちは、一つ一つの活動から目指す変革までのアウトラインを示した枠組みであるセオリー・オブ・チェンジを活動指針としている。その視点に基づき、YLAは、障壁を打破しリーダーシップを強化するための道筋を描き出している。YLAが、ユース女性にリーダーシップを発揮するためのツールを提供することは、各国政府のNDC目標達成とSDGの現地レベルでの達成の加速化を直接支援することにつながる。

次頁に、YLA内でその変革がどう展開されるかを示した表がある。ユース女性が抱える構造的課題を起点に、私たちが提供する実施可能な取り組みを経て、最終的に彼女たちがそれぞれのコミュニティに持続的な社会的変化をもたらす道筋をたどっている。





下の表は、YLA内でこの変革がどう展開されていくかを、より鮮明に理解する助けになる。ユース女性の抱える課題から、参加する様々な活動を経て、それが彼女たち自身のリーダーシップに火をつけ徐々に高め、それぞれのコミュニティに変化を巻き起こし始めるまでの過程を示している。このように、セオリー・オブ・チェンジは、プログラムの異なる部分がどのように相乗効果を発揮しながら徐々に、私たちが目指す、より広い社会的変化をもたらしていくかを可視化している。



2

私たちが目指すもの:
各目標と250万人へのリーチ目標

YLAは、ロックフェラー財団の支援を受けて行われているプラン・インターナショナルの事業であり、気候変動やジェンダー正義分野の次世代リーダーたちの飛躍の場となることを目指している。

YLAは、ユース、特にユース女性が、気候変動への適応に向けた取り組みを主導し、働きかけるための能力を身につけることに重点を置いている。同プログラムは、複数国でのアドボカシーやコミュニティ活動を通して、**当該地域全体で250万人**へのリーチを目指している。

その実現のため、YLAはユースアンバサダーが真の変化を推進する上で必要なスキルやネットワーク、経験を習得するためのプログラムを3つの柱に基づいて構成している。



目標　ジェンダー公正な気候変動対策を　250万人　に届ける

ユースのパワー

気候変動とジェンダー領域でのユースのリーダーシップ強化

- ツールを活用した講座
- 専門家によるメンタリング
- ワークショップ

ユースの無限の可能性

ユース主導の現地の気候変動対策の実施

- ユース主導の気候変動対策に対するシード助成金
- オンライン上でのアドボカシー

ユースの上げる声

気候変動政策にユースが意義のある形で参加するための働きかけ

- ユースを気候変動政策の議論の場につなげる
- YLS

この一体化した学習プロセスを通して、ユースアンバサダーはそれぞれのコミュニティのみならず、それを越えて、実行可能な対策を講じ、有意義で持続可能なインパクト(社会的変化)を起こす力を備えた変革の担い手として成長していく。

YLAの活動スケジュール



2024年6月

交流と広報

- 32の気候変動と環境関連のコミュニティ
- 8つの大学の学生運営委員会
- 5つのユース主導の組織

2024年6月から8月まで

YLAユース選考

- 5つの実施対象国
- 261人の応募者

2024年7月から8月まで

YLAモジュール講座

- 気候変動対策とアドボカシーに関する5つの包括的なテーマとツール

2024年8月

YLAキックオフ・ウェビナー

- ユースアンバサダーとして選出された40人およびユースのネットワークや主要な関係者を含む90人が参加

2024年9月から10月まで

ワークショップとメンタリング

- 5回のワークショップ
- 5回のグループ・メンタリング

2025年1月から10月まで

シード助成金プロジェクト

- 8グループ
- 5人の国別のメンター

2025年10月12日

インドネシアでのYLS

- 8件のユース主導プロジェクトの発表
- 25人の著名な講演者
- 9つの洞察に満ちた講演

2024年6月から2025年10月まで

世界規模の気候変動対策フォーラム

- AsiaXchangeにユースアンバサダー2人が参加
- APMCDRRにユースアンバサダー2人が参加
- COP29にユースアンバサダー1人が参加
- COP 30にユースアンバサダー4人が参加
- RHPW 2025にユースアンバサダー1人が参加

第1段階
広報と選考

同プログラムの第1段階として、2024年6月に、多様で潜在能力の高い参加者を見つけ、採用するために様々な手段で戦略的な「広報と選考」活動が実施された。同プログラムは、ユースリーダーがすでに大勢いる関係者との連携を積極的に行った。これにより、定評あるコミュニティと学術ネットワークに情報をしっかりと周知することができた。



33
の気候関連・環境関連グリーンコミュニティ

9っ
の大学の学生運営委員会

15っ
のユース主導の組織

第2段階
ワークショップとメンタリング

YLAの能力開発期は、集中的な学習過程による知識と自信の向上を目的として設計された。40人のユースアンバサダーは、キックオフ・ウェビナーを皮切りに、専門家の講演者による5回の包括的なワークショップに参加した。

ワークショップは各回、前回の内容に積み上げる形で進められ、5人の専門家が指導に当たり、毎回非常に有意義な講習を行うことで、一歩一歩確実に成長が積み上がる形にした。

ワークショップ1

行動するリーダーとは?
気候変動とジェンダー問題への対応



Amanda Katili博士気候変動
リーダーシップコーチ

本ワークショップでは、様々なリーダーシップの形が紹介され、参加者は異なるチームや状況に応じて取り組み方を調整する方法を学んだ。また彼らは、課題を克服し、気候正義やジェンダー正義に向けた前向きな変化を推進するための戦略も探った。

ワークショップ2

ジェンダーの視点から考える気候正義 - 公平な解決策の構築



Ranjitha Puskur博士
ジェンダーと生計

本ワークショップでは、気候変動をジェンダー正義に関わる問題として捉える理解を深めるとともに、ジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ(GTA)を紹介した。国際稲研究所のRanjitha Puskur博士が講師を務め、参加者は、最も弱い立場に置かれた人びとを支援する、公平でジェンダーの視点に立った取り組みを設計する力を身につけた。

ワークショップ3

気候変動政策を読み解く - 地域から世界へ広がる行動



Jovelyn T. Cleofe
気候変動政策分析

本セッションでは、気候変動とジェンダー平等のつながりを取り上げ、気候変動の影響が、とりわけ女性や女の子に異なる形で及んでいることに焦点を当てました。参加者は、包摂的な解決策の重要性について議論するとともに、より公平で公正な気候変動対策の実現に向けて、研究がどのように貢献できるかを検討しました。

ワークショップ4

変革力を高める - アドボカシープロジェクトの計画と資金調達



Dian Onno
ソーシャル・アントレプレナーシップ

本ワークショップでは、予算策定、インパクト測定、セオリー・オブ・チェンジ等、プロジェクトの計画策定や設計に関する実践的な指導が行われた。インパクト測定コンサルタントのDian Onnoによる本ワークショップを通して、参加者はシード助成金プログラムに向けて、明確で資金調達可能な提案書を作成する力を身につけた。

ワークショップ5

気候変動対策に関するアドボカシーのための効果的なコミュニケーション戦略



Emmanuel Pastores
コミュニティ開発

本ワークショップでは、より広くより強く声を届けてコミュニティを動かすために、参加者のストーリーテリング(社会課題やリスクなどの背景と活動を一連のストーリーでつなぎわかりやすく伝え、関係者を巻き込む手法)の力と人を動かす力の強化を目指した。コミュニティ開発の専門家Emmanuel Pastores による本ワークショップは、「ユースの上げる声」の柱を強化する内容で行われ、参加者は自身の考えを効果的に伝え、同プログラムが掲げる250万人へのリーチ目標達成を後押しする力を身につけた。



ワークショップと並行して、参加者は理論の実践を目的とした、メンターとの個別メンタリングを受けた。ワークショップで概念をしっかりと定着させつつ、各参加者が学んだことを自身の状況に当てはめてアイデアにまとめ、プロジェクト計画を練り、枠組みを現実の状況に適応させる助けとなった。経験豊富なメンターと対話する中で参加者は理解を深め、現実に即した質問をし、得られた知見を実行可能な戦略に落とし込むことができた。

メンタリング 1

コミュニケーション能力やチーム管理スキルを向上させる一方で、個別コーチングによる個人のリーダーシップ能力強化を重点的に行い、参加者が自身のリーダーシップ上の課題に取り組めるよう後押しした。

メンタリング 2

参加者がジェンダーと気候変動の関連性について理解を深め、自身のプロジェクトでジェンダーに配慮した取り組み方を設計し、適用できるようになった。

メンタリング 3

参加者が気候変動対策の議論の場で上手く立ち回って意思決定者とより効果的に関わるためのアドボカシー戦略について指導を行った。

メンタリング 4

参加者は、計画/資金調達からジェンダー・トランスフォーマティブの視点の導入に至るまで、プロジェクト開発のサポートを受け、シード助成金プロジェクトを持続可能なものにするための準備を整えることができた。

メンタリング 5

参加者のコミュニケーション能力と人を動かす力を高め、彼らが効果的なアドボカシーを行ってコミュニティと関係を築き、YAPを積極的に活用して活動を拡大できるようにした。

第3段階 ユース主導の取り組み

ユースリーダーを発想から行動へと動かすことへの注力、これこそがYLAの中核である。多くのユースが気候変動やジェンダー正義について思い切った考えを抱きながら、利用できるリソースや資金、支援体制が不足する現実のなかで尻込みしていることがあまりにも多い。活動やアドボカシーのためのシード助成金プログラムは、そうした活動を阻む障壁を解消するために設けられた。同プログラムは単なる資金援助ではなく、ユースアンバサダーが自身のコミュニティで先頭に立って有意義な変化を起こすために必要な資金やメンタリング、ツールを付与し、自身の考えを実世界にインパクトをもたらすものへと変える出発点となった。

同プログラムが提供したもの	**8**つのユース主導のチーム	各チームに対し**2,000**ドルの助成金	**10**カ月の実施期間	**5**人のメンターによるプロジェクト実施に関するメンタリング

シード助成金によって実現したこと

1

知識の活用

ユースは、プロジェクト設計・ジェンダーの視点に立った計画策定・アドボカシーの領域で、学んだことを実践した。

2

取り組みの強化

シード資金とメンタリングにより、より強固で持続可能性の高い行動計画が策定できた。

3

現地の変化を促す

ユースは、プロジェクト設計・ジェンダーの視点に立った計画策定・アドボカシーの領域で、学んだことを実践した。

4

エビデンスを得る

プロジェクトを通して、ストーリー、データ、変化の裏付けが集まり、各アンバサダーの活動実績になった。

オンライン上のキャンペーン: 声を影響力に変える



現場に変化をもたらしたのがシード助成金プロジェクトであるのに対して、その変化の輪を地域や世界規模の視聴者に広げることを目的として設計されたのがユース主導のオンライン上のキャンペーンである。その取り組みは、「ユースの上げる声(アドボカシーと働きかけ)」の柱を支える一番の原動力であり、本プログラムが掲げる**250万人へのリーチ目標**を達成する上で鍵となる戦略であった。

ユース主導のソーシャルメディア・キャンペーン

8つのシード助成金チームが5カ国で独自のアドボカシーキャンペーンをオンライン上で展開し、現地のプロジェクト成果が自身のコミュニティのストーリーとして伝えられ、人々を引きつけた。

YAP

プラン・インターナショナルのYAPを利用して、40人のユースアンバサダー全員が1つの共有デジタルハブ上でキャンペーンの展開やツールと学習教材の活用を通してつながり、地域や世界中の視聴者に彼らが共同で行った取り組みの軌跡を紹介した。

第4段階
働きかけと事例紹介

気候変動対策に関するユースの声:
現地の知見から世界規模のアドボカシーへ

YLAは、ユースの情熱と政策への影響力との間にあるギャップを埋め、ユースアンバサダーの声が聞かれるだけでなく、彼ら自身が政策形成に積極的に関わることを目指した。「ユースの上げる声(アドボカシーと働きかけ)」の取り組みを通じて、本プログラムは、彼らが地域に根ざした知見をハイレベルなアドボカシーへと直接つなげる道筋をつくった。

この取り組みは、ユースアンバサダーを世界的な意思決定に関わる、十分な知識を備えたパートナーとして位置づけ、政策の場でユースの役割を限定しがちな「形式的参加」にとどまらないことを意図したものだった。

APMCDRR
2024年10月12日から10月19日まで、
マニラ、フィリピン



AsiaXchange
2024年10月1日から10月3日まで、
バンコク、タイ



COP29
2024年11月11日から11月22日まで、
バクー、アゼルバイジャン





COP30
2025年11月10日から11月21日まで、
ベレン、ブラジル

YLS: 成果を集約し、称える

18カ月にわたるYLAプログラムを締めくくるYLSは、2025年10月12日にインドネシアのジャカルタで開催された。参加が確認された人は計1,661人で、そのうち267人が会場で参加し、約1,394人がZoomやYouTubeを通じてオンラインで参加した。YLSは、ユースアンバサダーがプログラムの参加者から、地域で認められるリーダーへと成長していく重要な転換点として位置づけられた。

YLS 2025には、政府、市民社会組織(CSO)、民間部門、ユースネットワークから35人の講演者とモデレーターが参加した。ハイブリッド形式で開催したことで世界各地から幅広い参加が可能となり、多様な視点を取り入れた充実した議論と、国を越えた活発な意見交換につながった。また、17のパートナー組織や機関の支援を受け、Media Indonesiaを含む4つの全国メディアでも報道された。これにより、地域全体でジェンダーと気候変動に関する取り組みを進めるユースの変革の担い手の声やビジョンが、さらに広く届けられた。イベントの熱気やそこで生まれた刺激を振り返ることができるYLS 2025のハイライト動画は、プラン・インターナショナル・インドネシアのYouTubeチャンネルで視聴できる。









講演

基調講演、全体講演、グループ形式の講演等、計9つの洞察に満ちた講演が行われた

プロジェクト紹介

YLAで実施された、ジェンダーや気候変動の視点に立つ8つのユース主導プロジェクトが、短い動画とプレゼンテーションで紹介された

展示

ユース主導のプロジェクトと他の出展者による展示

上演

開会及び閉会時に行われたインドネシアの伝統と現代文化が独創的に融合したパフォーマンス

その他の活動

楽しい教育的なゲーム、photobox、メッセージで埋められた壁、自由なネットワークづくり、イベント翌日のメディア訪問

プログラムMEL

YLAがどう変化を起こすかを理解するために、私たちはプログラムの各段階での学びを把握・記録する体系的な手法を採用した。MEL(モニタリング、評価、学習)の枠組みを活用することで、募集からリーダーシップ実践に至る過程をたどりながら、数値とストーリーの両方で、参加者の経験と成果を映し出すことができた。以下の概要では、私たちが参照した主要なデータ源と共に量的な指標と、応募者、メンター、ユースリーダーから収集した豊富な質的知見を合わせて示している。これらの要素が一体となり、インパクト分析の基盤を形成している。次のセクションでは、それらのツールや方法がどう組み合わさり、本報告書で示される調査結果が導き出されたのかを詳しく説明する。

選考と周知 >> **能力開発** >> **ユース主導の取り組み** >> **発表と働きかけ**

量的

選考と周知	能力開発	ユース主導の取り組み	発表と働きかけ
• 応募者の追跡 • インタビューの採点 • 包括性を確保するための参加者の人口動態データの最終確認	• 参加前および参加後のテストの得点 • メンター評価シート • 出席記録	• シード助成金の予算 • ユース主導のキャンペーンの進捗記録	• シード助成金の予算 • ユース主導のキャンペーンの進捗記録

量的

選考と周知	能力開発	ユース主導の取り組み	発表と働きかけ
• 応募者のエッセイの分析	• ワークショップ終了後の振り返りフォーム • メンターの指摘事項の分析	• シード助成金の提案書 • 月次進捗報告書(第1・2段階) • メンターの現地視察報告書	• イベント終了後の調査での自由記述形式の振り返り

調査方法



YLAのインパクト

私たちは、ダブル・ダイヤモンド手法の4つのフェーズに沿って、ユーザーを中心に据えた明確なプロセスを構築した。この方法により、YLA成果報告書は単なるデータの集積にとどまらず、「ユースの無限の可能性」に関わる参加者が経験した変革の過程を効果的に伝える報告書となっている。



第1期 戦略の策定

インパクト評価の手法と手段の確立

第2期 データ収集

倫理的で効果的な、豊富で多面的なデータ収集

第3期 分析と統合

生データから有意義な洞察とストーリーを引き出す

第4期 ストーリーテリングと報告

プロジェクト成果を、説得力のある視覚的にも素晴らしい形で文書にまとめる

活動

- 相談会
- データ収集ツールの共同設計と、詳細な着手報告書と作業計画書の作成
- 調査方法の開発と対象者の抽出に関する戦略

- 既存データの検証
- 参加者全員へのアンケート
- ユースの対象者が共有する体験を探るための、フォーカス・グループ・ディスカッション(FGD)
- ユースと関係者に対する詳細なインタビュー(IDI)

- 量的データの統計分析
- 質的データのテーマ別分析
- 仮説の検証
- 特定の基準と規則に従ってデータを整える
- 回帰分析(ある要素に対して他の要素がどの程度影響を与えているかを分析)

- ストーリーの章の起草および報告書や書籍のデザイン
- インフォグラフィック制作
- 意見収集と修正
- デジタルまたは印刷可能な形式での最終納品

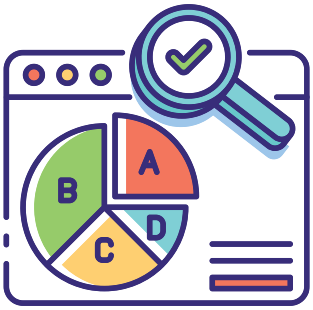
データ収集

ジェンダーの視点に立つ気候変動対策がもたらした成果を文書で記録するには、それらを推進するユースリーダーの声を直接聴くことが必須だと私たちは考えている。私たちの調査方法では、得られたすべての調査結果を様々な情報源にわたって異なる角度で検証することで、単なる成果報告を超え、無限の可能性を持つユースが達成した変革の全体像を把握することが可能になる。

- 一次データ収集　アンケート、IDI、FGD
- 二次データ収集　既存のYLA関連資料、ユースチームから提出されたプロジェクト終了報告書、能力開発ワークショップの資料

データ収集手法	範囲と目的	対象者の詳細	結果
 量的アンケート	リーダーシップに対する自信やジェンダーの視点に立つ気候変動対策に関する知識、プロジェクト管理スキルの活用に関する、参加者の自己申告による回答の変化を測定した	1種類のアンケートの調査を40人のユースアンバサダーを対象に実施	31人のYLAユースアンバサダー(77.50%)が回答
 IDI(特定のテーマ・問題について深く掘り下げて行うインタビュー)	参加者自身が感じる個人的な変化、プロジェクト実施中に克服した具体的な課題、メンターによる詳細なメンタリングについて質問した	計8回のインタビュー対象者: ユースアンバサダー5人(対象全5カ国を代表するプロジェクト実施担当者)、メンター3人、主要プロジェクト実施担当者2人	プロジェクトを実施済みあるいは実施中である、5カ国を代表する5人のユースアンバサダー(女性3人、男性2人)、プロジェクトマネージャー兼ユースエンゲージメント担当職員1人、プロジェクトのモニタリングに積極的に参加している人物2人にインタビューを実施
 FGD	本プログラムの強みと弱みに関する参加者全体の見方の把握および参加者同士の学びの促進、そして今後のプログラム設計に向けた意見の収集を行った	1回のFGDの対象者: 8人のユースアンバサダー(プロジェクト実施担当者3人と、現地・国・地域レベルのアドボカシーに積極的に携わっている参加者5人)	5カ国を代表する8人のユースアンバサダー(女性5人、男性3人)の内、3人はプロジェクトを実施済みまたは実施中であり、5人は現地・国・地域レベルのアドボカシー活動に参加

制限事項



本成果報告書では、複数の調査手法を組み合わせ、ダブル・ダイヤモンドの枠組みを用いて、量的調査、質的インタビュー、フォーカスグループディスカッション(FGD)の結果を統合した。ただし、調査結果を解釈する際には、以下の制限事項を考慮する必要がある。

1. 自己申告によるデータへの依存

質的データの内、特に「ユースのパワー(リーダーシップと自信))」と「ユースの無限の可能性(知識)」については、データの大部分が参加者の自己評価に基づいている。自己申告によるデータは主観的になりがちであり、参加者が自身の成長を、外部の観察者が捉えたものとは異なって認識している可能性がある。

解釈上の注記: この問題を軽減するため、自己評価の結果をメンターや関係者による外部視点を用いて、ユース主導のシード助成金プロジェクト8件の具体的な成果と照合して検証した。

2. 遡及的想起バイアス

一次データ収集はYLAプログラムサイクルの終了時に行われたため、参加者は自身の成長や経験を振り返って評価するよう求められた。そのため、想起バイアスが生じる可能性がある。つまり、「プログラム開始前」の能力に関する記憶が、現在の状況やYLAを無事に修了したことの影響を受ける可能性がある。

解釈上の注記: 可能な限り、分析には研修前のアンケートや応募書類等、既存のベースラインのデータを組み込み、遡及的な知見は文書に記録されたエビデンスで裏付けるようにした。

3. 複雑な仕組みに起因する問題

YLAが活動するのは、気候正義とジェンダー平等という複雑な領域である。本報告書は、YLAの活動と参加者の成果(例えば国際的なフォーラムでの政策への働きかけ)との間に明確な相関関係があるとはっきりと指摘しているが、社会や政策の広範な変化を本プログラムだけの成果だと考えるのは困難である。

解釈上の注記: 本調査結果は、「起因」ではなく「寄与」という視点に基づいている。私たちは、政策の変化がすべてYLAの功績だと主張するのではなく、YLAが参加者の行動能力にどう寄与したかを示している。

4. 質的事例研究の代表性

詳細な質的調査(IDI)は、対象5カ国(インド、インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイ)と様々な種類のプロジェクトを代表して、8人のユース参加者と5人の関係者を対象に実施された。だが、彼らから得たエピソードは、対象集団全体の体験に関する統計的データではなく、実際の事例を示す事例研究としての役割を果たしている。

解釈上の注記: こうしたエピソードは、本プログラムを通して何が可能かを示す「深さ」の指標であり、一方、広範な調査結果は、対象者全体に及ぶ影響の「幅」を示すものとして捉えるべきである。

5. 異文化間・文脈の間の差異

本プログラムは、気候変動ガバナンスやユースの参加に関する政治的状況が異なる5カ国で実施され、それらの国々の地域全体のデータを集計すると、特定の現地に存在する障壁や促進要素がわかりにくくなる場合がある。

解釈上の注記: FGDは、地域的な多様性を踏まえながら、集約された調査結果にユース全体の経験を確実に反映することができるため、「共通する考え方と言葉」を把握する上できわめて重要な役割を果たした。

インパクト効果分析



YLAのインパクト測定は、プログラムの活動やパートナーシップ・プログラムの柱(ユースのパワー、ユースの無限の可能性、ユースの上げる声)に注目して行われる。こうした要素を総合的に検討することで、YLAがどのようにユースの成長や行動を後押しし、気候変動やジェンダー問題の解決に貢献しているかを把握することができる。



1. プログラム活動とパートナーシップ

YLAが5カ国で実施した初期のプロジェクト周知キャンペーンから、シード助成金プロジェクトの最終的な実施まで、活動や連携を通してどの程度周知され、人々を動かしたかを評価する。指標には以下が含まれた。

- 応募者数
- プロジェクトの周知をしたパートナー数
- 協力した専門家の数
- ソーシャルメディア・キャンペーンのリーチ数
- シード助成金プロジェクトの参加者数

2. 本プログラムの柱

本プログラムの3つの柱(ユースのパワー、ユースの無限の可能性、ユースの上げる声)は、ユースアンバサダーがYLAの概念を理解し実践的スキルを身につけるためのものだ。これらが結びつくことで、彼らは自信、リーダーシップ、知識、プロジェクト管理、アドボカシーという基礎となる5つのスキルを身につけることができる。これらのスキルは、ユースが気候変動やジェンダー問題のアドボケイトとして力を発揮する土台となり、彼らは、グリーンジョブ(環境に配慮した活動に従事する仕事)やコミュニティの指導者的役割、正式な統治や管理の場などの実社会で機会をつかむ準備を整え、その声と行動で有意義かつ長期的な変化をもたらしていくことができる。本報告書の次の部分では、5つの基礎となるスキルについて自己申告した変化に基づき、本プログラム参加前後でのユースアンバサダーの成長を分析する。



ユースのパワー

自信

自信は行動の基盤であり、ユース世代の中で考えを持っているだけの者と実際に既存の制度に挑戦する者を分けるものである。自信をつけることで、人びとは人前で発言し行動することができる。自信が高まれば、人びとは積極的に前に出て、質問し、考えや解決策を提案するようになる。ユースアンバサダーが自信を持つことで、彼らが政策対話に参加し、協議に加わり、現地、国、地域、世界規模のフォーラムでコミュニティの代表を務める可能性は高まる。自信は彼らの発言を大胆で一貫性のあるものにする。自信があれば、彼らの声は力強くなり、その声はコミュニティの声となる。

リーダーシップ

気候危機に対する革新的な考えや提言、そしてその待ったなしの状況を伝えるユース主導の取り組みは、変化の原動力となるため、その意味はきわめて大きい。そうした取り組みを開始させ、そして継続させていくには、適切なリーダーシップが求められる。リーダーシップスキルは、ユースが他者を導き、議論をまとめ、人々を団結させるのに役立つ。また彼らが、人々を組織化し強い集団をつくる上でも役立つ。しかし、優れたリーダーシップとは、すべてを支配することではなく、誰もが参加できる環境をつくり出すことに他ならない。ユースアンバサダーが人々に寄り添う寛容なリーダーであれば、学校や近所、ユースクラブ等のコミュニティを動かし、皆で気候変動やジェンダー問題に対して行動を起こすことができる。そうした集団としての取り組みを積み重ねていくことが、コミュニティの行動変容につながり、長期的なコミュニティのレジリエンスを高める。

プロジェクト管理

プロジェクト管理スキルは、ユースアンバサダーにとって、考えを実現し、実践的なものにするための鍵となる。彼らのプロジェクト管理は行動の証となり、政策決定者からの信頼度を高める。彼らは、活動の計画策定やチームの調整、時間とスケジュールの管理、状況の変化に伴う問題解決方法を学んだ。ユースが啓発キャンペーン、ワークショップ、気候変動適応活動等の、コミュニティプロジェクトの運営を成功できれば、彼らはコミュニティ住民や地方自治体(LGU)との間に信頼を築くことができる。その信頼は、継続的で長期的な協働への扉を開く第一歩であり、将来のリスクに対するコミュニティの対応能力を高める。

ユースの無限の可能性

知識

ジェンダーと気候変動問題、特にその2つがどう交差しているかを深く理解することで、ユースアンバサダーはこの問題の全体像をより広い視野で捉えることができる。その知識は、明確でエビデンスに基づいたメッセージの発信の助けとなる。気候変動が女性や子ども、疎外された集団にそれぞれどう異なる影響を及ぼすかを理解していれば、彼らは明確に、そして堂々と発言することができる。そうした知識を持つことで、彼らはコミュニティ組織、コミュニティ指導者、政策決定者との議論で説得力のある主張を展開することができる。また、実際のニーズを考慮し、誰も取り残すことのない活動を設計する上でも役立つ。

ユースの上げる声

アドボカシー

問題、事実、数値、個人の歩みをどのように語れば組織を動かせるかという点で、働きかけは1つのストーリーテリングだと言える。アドボカシーは考えを影響力へと変える。ユースアンバサダーが、意見の伝え方や関係者との接し方、ストーリーの効果的な伝え方を身につければ、より広い世界に問題を提起することができる。高いアドボカシースキルは、彼らの声を意思決定機関へとつなぎ、それは彼らに、公的な協議の場に参加して地元自治体の計画策定に加わり、気候変動適応策やジェンダー平等、社会的保護を後押しする、より包摂的な政策を推進する力を与える。そうしたスキルを持つユースは単なる参加者ではない。彼らは、体制のあり方を決める力を持つ変革の担い手となる。

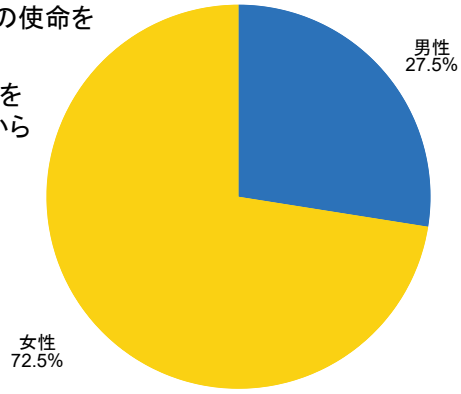
A

プログラム活動とパートナーシップの事例

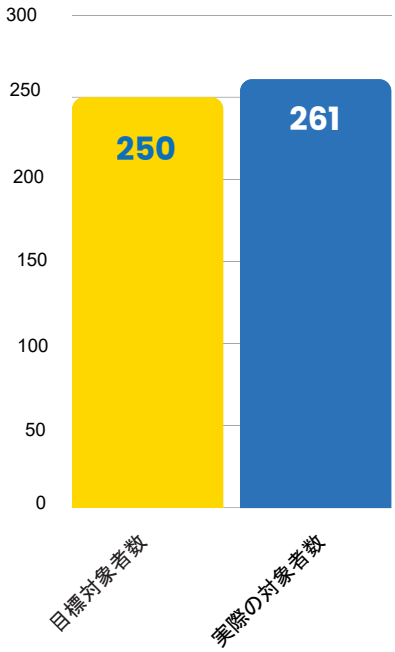
1. 戦略に基づいた周知と対象者の選定

YLAの成功は、2024年6月の戦略に基づいた周知活動期から始まった。本プログラムは当初設定した250人の応募者を集めるという野心的な目標を見事に上回り、実施対象5カ国からユースリーダー261人の応募が集まった。その関心の高さから選考は順調にすすみ、最終的に40人のユースアンバサダーが選出された。最終的に選出された対象者は、72.5%が女性、65%が先住民やLGBTQ+などの疎外された集団に属する者となり、本プログラムの使命を強く反映するものとなった。

その結果自体が、YLAがGTAへの注力をプログラムの基本原則として設計当初から守り続けてきたことを示す確かな証拠であり、きわめて大きな意味を持つ。



YLAアンバサダーのジェンダー内訳 (n= 40)



パートナーシップと周知活動
33の気候関連・グリーンコミュニティ
9つの大学の学生運営委員会
15つのユース主導の組織

応募者登録
261人のユース応募者が登録

オンラインまたは対面での面接
71人の候補者がオンライン/対面面接を受けた

ユースアンバサダーの選出
40人のYLAユースアンバサダー

本プログラムは、パートナーとの強力な連携を生かし、幅広い周知と広報活動を展開した。YLAチームは、応募を待つ受け身の募集ではなく、ユースリーダーがすでに集まる既存のネットワークに積極的に働きかけた。

こうした連携先には、32の気候変動や環境に関するコミュニティ、8つの大学の学生運営委員会、5つのユース主導組織、ユニセフ・インドネシア、環境林業省や教育文化省などのインドネシア政府の主要機関が含まれた。YLAは、こうしたパートナーとの連携を通じて、対象コミュニティの幅広い層に情報を届け、多様で質の高い応募者を集めることができた。

2. ソーシャルメディア・キャンペーンの分析

「ユースの上げる声(アドボカシーと働きかけ)」の柱を強化するため、YLAは、ソーシャルメディアでのキャンペーンと、複数のYLAイベントで行う対面での働きかけを組み合わせた、多層的なアウトリーチ戦略を展開した。この戦略は、本プログラムが掲げる250万人へのリーチ目標を達成するための中核となっている。2025年11月時点で、プラン・インターナショナルのインド、インドネシア、ベトナム、タイ、フィリピンおよびAPACのソーシャルメディア、8つのユース主導の取り組み、8つのシード助成金プロジェクトの対象者、YLAイベントの参加者を通じて、幅広い人びとに働きかけてきた。オンラインキャンペーンのリーチ数と対面イベントの参加者数を合わせた本プログラムの総リーチ数は、189万283人に達している。以下に、その内訳を示す。

YLA プログラムの総リーチ数内訳

プラン・インターナショナルのソーシャルメディア	YLSや成果報告書発表等のYLA内部イベント	プラン・インターナショナルのソーシャルメディア	8つのシード助成金プロジェクトの参加者	合計
179万2,981人	1,661人	179万2,981人	6,100人	189万283人

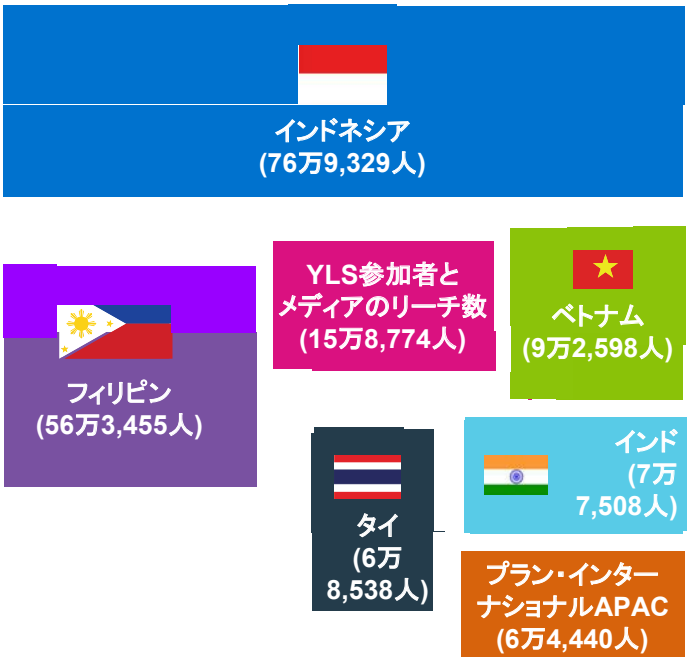
経過に関する注記

提示されているデータは2025年11月20日時点のものであり、キャンペーン活動は年末まで継続することを踏まえると、本プログラムは2025年末までにリーチ数250万という目標を達成もしくは上回る可能性がある。

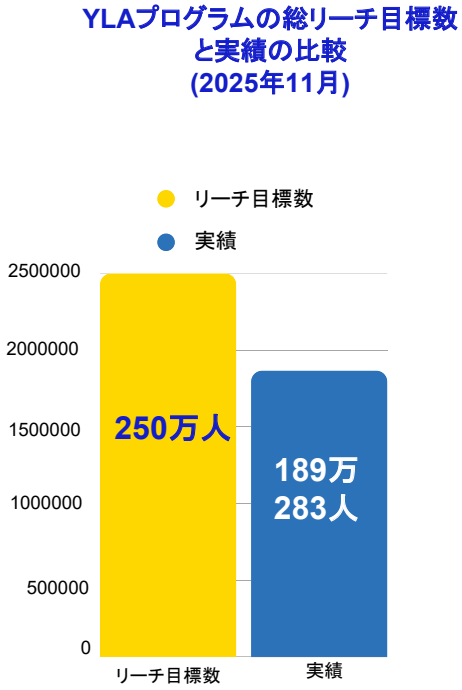
この高いリーチ数は、数値として注目に値するだけではない。それは、気候変動やジェンダー正義に関するアンバサダーのメッセージがデジタル空間の雑音にかき消されることなく届いていることを意味する。この2本立ての戦略が、幅広く地域レベルの視聴者をつかみ、彼らを目標に向けて行動する現地コミュニティに変貌させる力をユースリーダーたちに与えた。

プログラムレベルのキャンペーン 地域のストーリーを紡ぐ

本プログラムのプログラムレベルのキャンペーンは、視聴者を増やし、地域全体の独自性を固める上できわめて重要だった。このキャンペーンは、参加5カ国とプラン・インターナショナルの地域チャンネルを通して、計179万4,642人へのリーチの達成に成功した。キャンペーンの成果は特にインドネシアで顕著で、150万人超のリーチ数を記録した。



プログラムレベルの合計= 179万4,642人



ユース主導のキャンペーン 現地での活動の推進(実行中)

ソーシャルメディア・キャンペーンと並行して、シード助成金の対象に選ばれた8つのチームは、YLAワークショップで習得したスキルを活かして独自のキャンペーンを展開。コミュニティに深く入り込んだ住民への働きかけに重点を置き、人々のオンライン上での関心を現場で実際に参加する行動へとつなげた。

こうしたユース主導のキャンペーンにより、各コミュニティへの直接的なリーチ数は計**9万5,641件**に達し、スキルを上手く活用できたことがわかる。「Girls Climate Parliament(GCP)」の参加者数(6万8,269人)は、現地の人々の関心が非常に高いことを示すものだが、特化した現地プロジェクトの実施をサポートするためにオンライン上のプラットフォームを活用したプロジェクトもあった。

キャンペーンからの主な知見

1. 最も実績の高いチャンネル: インドネシア

本プログラムのリーチ数に最も大きく貢献したのは、インドネシアだ。プラン・インターナショナル・インドネシアのInstagramアカウントが顕著な成果を上げ、リーチ数は76万9,329、エンゲージメント数は2万8,642に達した。これは、インドネシアのユースの間でオンラインの存在が大きく、また気候変動やジェンダー問題に対する関心も高いことを浮き彫りにしている。

2. リーチ vs エンゲージメント率(ユーザーがどれだけ反応したかを示す割合)

リーチ数が、ユーザーに到達して認知された範囲を測るものであるのに対して、「エンゲージメント」はユーザーが「いいね」やコメント、共有、保存する度に加算され、ユーザーとの交流の深さを測る指標である。それは、そのコンテンツがどの程度ユーザーの心に響いているかを示す重要な指標である。

国/パートナー	総リーチ数	総エンゲージメント数
インドネシア	769,329	28,642
フィリピン	563,455	3,197
ベトナム	92,598	1,512
インド	77,508	5,179
タイ	68,538	3,498
プラン・インターナショナル APAC	64,440	2,244
YLSメディアパートナー	157,110	(記録なし)
YLS参加者	1,661	1,661
合計(プログラムレベル)	**1,794,642**	**45,924**



プログラムレベルのデータ(エンゲージメントに関するデータが存在しないYLSメディアパートナーは除く)によると、キャンペーンのエンゲージメント率(リーチ総数に対するエンゲージメント数の割合)は約2.8%だった。

プログラム成果

本プログラムの対象者

YLAの参加者は、5カ国からの40人のユースリーダーで構成された。プロジェクトチームを含めた内訳は以下の通り。



インドネシア	インド	フィリピン	タイ	ベトナム
Abdi	Deepti	Aires	Bas	Hai
Alvian	Divya	Crizza	Gun	Kat
Ebi	Ekta	Delson	Honey	Kim
Fafa	Girish	Jonna	Tomoko	Linh
Gita	Kanchan	Rex	Yah	Monika
Kevin	Mangal			My
Stevi	Muskan			Nhi
Theresia	Sanjana			Thu
Venta	Sonia			Tuan
Zafra	Yash			Trinh

プログラム協働者 (能力構築期)

ユースアンバサダーは、3カ月のYLA講座期間中、13人の専門家から成る専任チームから研修と指導を受けた。



講演者

Amanda Katili博士
Ranjitha Puskur博士
Jovelyn T.Cleofe
Dian Onnno
Emmanuel Pastores

メンター

Quyen Nguyen
Margianta S. J. D.
Pearl Mars
Giang Nguyen
M. Atha Rasyadi
Swietenia P. Lestari
Vaani Khanna
Konshika Koeswara

3. 波及効果(各コミュニティプロジェクトの参加者)

この段階で、40人のリーダーへの投資は変化の輪となってコミュニティ全体に広がった。ユース主導の8つのチームは、受講した研修と資金を実際の現場での活動へと見事に発展させ、2,500人超が実際に活動に参加し、さらに1,500人超のコミュニティ住民が街頭劇や啓発キャンペーン等の対面活動に参加した。

ここでは、プログラムの成果は誰が活動に参加したかという点に最も如実に現われる。各プロジェクトは、支援対象者としていた特定の疎外された集団を非常に上手く参加させることができており、これはGTAの手法が奏功したことを裏付けている。

プロジェクト	国	対象参加者と目指していた効果	プロジェクト概要
G1: The Green Caviar Project	タイ	村人90人と34世帯(大半が女性が世帯主)が栽培研修と持続可能な食料生産ワークショップに参加	現地の食料安全保障と生計を目的とした、気候変動にレジリエンスのある「ミジンコウキクサ」(藻類)の栽培
G2: YouLEARN	フィリピン	対象参加者1,808人(若い母親20人と障害のある者20人を含む)	独創的なゴミのリサイクル活動を通して、疎外されたユースに収入創出機会を提供
G3: SAFE	インドネシア	高校生625人が「De School」ワークショップや動画コンテスト等の様々な活動に参加	「zine」(自由なテーマと形式で製作できる冊子)や高倉式コンポスト技術を通して生徒が気候変動対策に参加
G4: EcoVibes	インドネシア	コミュニティ住民380人(子ども、ユース、女性)がゴミ、マングローブ植樹、エコスキル関連の複数のワークショップに実際に参加	ゴミをエコ製品として生まれ変わらせ、ゴミ処理に関する政策を提言
G5: The Safe Steps	ベトナム	ユース450人(ユース連合メンバー100人、小学生200人、オンライン参加者150人)が防災に関する研修を受講	視覚障害のある生徒を含む生徒を対象にした包摂的な防災研修を実施
G6: Future Green Warriors	ベトナム	ポッドキャストシリーズによる500人超のリスナーへのリーチと、(ユースと専門家)16人が制作過程に実際に参加	ユース主導のポッドキャストシリーズでユースリスナーが気候変動学習を受けられる環境づくり
G7: Green Voice	インド	ユース331人がワークショップやキャンペーンに参加し、コミュニティ住民1,580人が(街頭劇や壁画の)対面キャンペーンを体験	コミュニティ清掃活動や植樹活動を通じて草の根レベルのリーダーシップを育成
G8: Girls Climate Parliament	インド	8回の模擬議会やリーダーシップ研修、気候変動関連ワークショップを通して思春期の女の子311人の能力を強化	疎外された思春期の女の子が気候変動対策を設計し政策を働きかける能力を習得
全体的な影響		6,100人超がプロジェクトに直接参加	

B

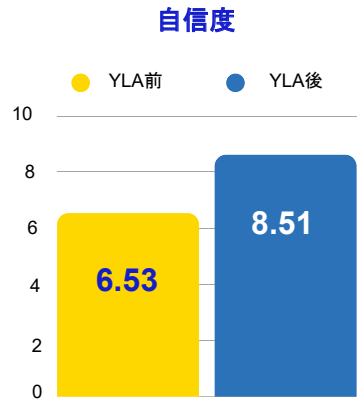
ユースのパワー（自信とリーダーシップ）

提言活動をするには、聴衆に語りかけ、働きかけるためのリーダーシップと自信が求められる。YLAは、ユースアンバサダーが自分自身の中の内なるリーダーを見出し、自信を高め、物事を実現するためのスキルを身につける手助けをした。講座内の活動やメンターとの意見交換を通して基礎となる理解を定着させ、それをシード助成金プロジェクトや気候変動に関するフォーラムに積極的に参加することで、実際の生活環境に適用させた。40人のユースアンバサダーの内、87.1%が自信の向上を報告し、その平均向上幅は2.25ポイントだった。また、80.6%のユースアンバサダーがリーダーシップスキルの向上を報告し、その平均向上幅は1.87ポイントだった。

自信の向上

YLAは、ユースアンバサダーの自信を著しく高め、彼らは気候変動やジェンダー問題について声を上げるアドボケイトとして存在感を増しつつある。プログラム終了後、彼らの自信は8.51へと大幅に上昇し、平均で+2.25ポイント(34.4%)向上した。その向上から、YLAの特化したカリキュラム、体験型学習、メンター制度、異文化間協働を通して、彼らが、彼ら自身やコミュニティのために声を上げるための自信をつける上で必要な基礎知識と目的意識を効果的に身につけられたことがわかる。



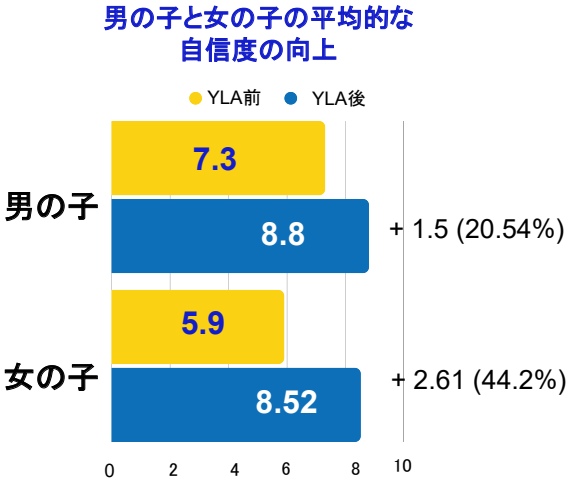


87%

のユースアンバサダーが「自信が高まった」と報告し、平均2.25ポイント上昇(34.4%)

ユースアンバサダーの内、3人が自信の度合いが5ポイント上昇したと、最も大きな向上を報告しており、リーダーシップ発揮に向け大きく変貌していることがわかる。一方、経験豊富なユースアンバサダー3人は、当初から自信があり、その自信を維持していた。興味深いことに、ある1人のユースアンバサダーは、本プログラムが自分を振り返るきっかけとなったという。

男の子全体の自信度は高いが、個人レベルの平均自信度に関しては、女の子が男の子より+1.11ポイント高かった。女の子全体の平均自信度は、当初の平均自信度5.90から8.52へと44.2%上昇したのに対し、男の子は当初の自信度7.30から8.80へと20.54%の上昇だった。



(自分の思考や感情を深く知る)
自己認識はリーダーにとってきわめて重要な基盤であり、それによって自分自身の強みや行動パターン、価値観、限界を理解することができる。明確な認識こそが、リーダーがより客観的な意思決定を行う、感情的知性に基づいて問題に対応する、変化する環境に迅速に適応することを可能にする。自分自身を深く知るリーダーは自分の中に偏見があることを受け入れ、仲間の潜在能力を認め、現実的で効果的なコミュニケーションをとり、チームの中に信頼を築く力を備えている。



事例研究

ベトナムのKatは、YLA参加前には知らなかった新しい知識や自分のこれまでの経験よりやりがいのある活動やプロジェクトに触れて少し落ち込むこともあったが、それは、新たな世界を知り成長する機会だと考えた。

「YLA参加前、自分は有能で自信に満ちたリーダーだと思っていました。YLAを終えた今、自分の限界や、理想的とは言えない環境で活動する大変さを痛感するようになり、自信の度合いは前より低下したと感じています。
でも、その自信の低下は必ずしも悪いことではなく、むしろ、この機会にどう臨むべきか、また様々な経験を通して前に進むには今後どれ程成長する必要があるか、自分自身を厳しく振り返るきっかけになりました」

ユースアンバサダーの自信は、多くの面で向上した。彼らの自信を高める上で不可欠な4つの要素がある。第1に、取り組みの提案であれ、チームの統率であれ、活動の管理・意思決定であれ、率先して行動する自信である。第2は人前で話す自信で、それも向上して自信を持って自分の考えを率直に述べられるようになると、大人数で多様な聴衆の前で話す際の緊張を克服できるようになる。第3に、能力が強化され自己効力感が持てると、彼らは目標達成のために集団/個人で行動する能力が自分にあると感じられるようになった。そして最後に本プログラムは、彼らが自分自身を深く知り、個人として、またリーダーとして成長する上で重要な問題について深く考える手助けを行った。YLAは、物事が必ずしも理想的とは限らない現実の状況を彼らに経験させ、自身の限界や自分を改善すべき点を受け入れるきっかけを与えた。

ユースアンバサダーの自信の向上に見られる4つの側面

率先して行動する自信	率先して動く、チームを牽引する、活動を管理する、意思決定を行う、際の自信が向上した
公で話す自信	自身の考えを言葉で表現する、聴衆の前で話す、人前でも緊張しない自信
エンパワーメントと自己効力感	自分の能力が強化され、自立した行動を取り、プロジェクトに着手し、目標を達成できると感じられるようになる
自己認識と批判的省察	自分の限界と、強化が必要な分野に気づき、受け入れて、地に足のついた自信を持つ

自信が高まったことで、ユースアンバサダーは、プログラムの活動や気候変動に関するフォーラム、シード助成金プロジェクトを通じたコミュニティへの働きかけにおいて、より積極的に発言できるようになった。こうした変化を象徴する経験も数多く語られた。あるユースアンバサダーは、緊張を乗り越え、人前でも落ち着いて発表できるようになったと振り返った。また、自信が大きく高まったことで、50から100人の多様な参加者が集まる活動を自信を持って主導できるようになったという声も聞かれた。あるユースアンバサダーは、**「YLAが、『自分にも本当にできる』という自信を与えてくれました」**と語っている。



「以前は公の場で話すのに気後れしていましたが、キャンペーンやCOP29の選考、ファシリテーションを通して自信がつきました。また、いろいろな学習過程に参加したことも役立ちました」

Kanchan、インド

全体的に、今回の調査結果は、YLAが彼らの自信を高め、思慮深く、有能なユースリーダーに育て上げたことを裏付けている。能力開発プログラム、異文化交流、横断的協働を組み合わせて実施したことで、ユースアンバサダーは自信のなさを克服し、自信と誠実さを持って主導することができるようになった。プログラム終了後も、この自信をもって様々な機会に臨むことで、地域全体のユースのエンパワーメントに対するYLAの影響力は一層高まることになる。



「YLA参加前は、複雑な考えをわかりやすく説明したり、多様な聞き手に合わせて自分のコミュニケーションの形を調整したりするのが苦手で、誤解を招くことが多かったです。プログラム修了後は、学んだスキルを様々な活動の場面で活かしました。その結果、自信を持って効果的にコミュニケーションをとる力が非常に高まり、協働的環境での活動が得意になり、仕事で新しい試みをする時もよい成果を上げられるようになりました」

Crizza、フィリピン

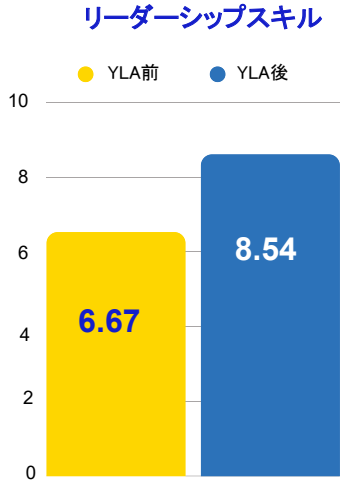
Before

リーダーシップの強化

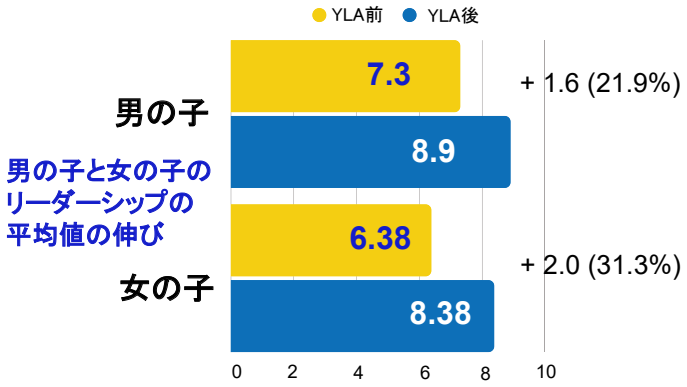
リーダーとして大きな志を抱くユースアンバサダーに対し、YLAは、彼らに講習会の進行・キャンペーンの運営や仲間と協働し士気を高める取り組みの機会を提供し、また、気候変動やジェンダーの視点に立った彼ら独自のシード助成金プロジェクトを主導する機会も提供した。その結果、YLAがユースアンバサダーのリーダーシップスキルを向上させたことが、統計的に示された。彼らの80.6%がリーダーシップの向上を実感し、10点満点中平均8.54というスコアを記録した。



80% **のユースアンバサダーが「リーダーシップが強化された」と報告し、平均+1.87ポイント上昇(28%)。**



全体としては男の子のリーダーシップの方が高いが、個人レベルでのリーダーシップの平均値は、女の子が男の子よりわずかに大きな伸びを示した。女の子全体のリーダーシップの平均値は、当初の平均値である6.38から8.38へと31.3%増加した一方、男の子は当初の平均値である7.30から8.90へと21.9%増加した。



本プログラムへの参加前、多くのユースアンバサダーは、リーダーシップ経験の少なさや、率先して行動することへのためらいを感じていた。YLA修了後には、リーダーとしての自信が高まり、意思決定力が向上するとともに、包摂的なリーダーシップへの理解も深まった。本プログラムを通じて、彼らは共感力、適応力、協働する力を生かしてリーダーシップを発揮できるようになった。ユースアンバサダーの多くは、プログラム終了後、自身のリーダーシップ能力が2から3ポイント向上したと評価しており、平均では1.87ポイントの上昇が見られた。こうした成長には、リーダーシップを発揮する機会、異文化間での協働、メンタリングや仲間との学び、シード助成金プロジェクトを実際に実施した経験が寄与した。一方、もともと豊富な経験を持つ4人のユースアンバサダーは、当初の高いリーダーシップ水準を維持した。また、グループリーダーを務める機会がなかったため、リーダーシップを伸ばす機会が限られていた可能性のあるユースアンバサダーも1人いた。



事例研究

フィリピンのDelsonは、10点満点中9という卓越したリーダーシップレベルを維持している。YLA参加前、Delsonはプラン・インターナショナルのプログラム Urban Nexusに3年間参加し、同様のプロジェクトをすでに長期にわたり実施していた。Delsonにとって、YLAはジェンダーと気候変動との交差性に関する知識を深めるきっかけとなったが、必ずしもリーダーシップスキルの向上につながるものではなかった。





ベトナムのNhiは、チームを主導する機会がなかったため、自身のリーダーシップスキルに変化を感じなかったという。彼女は、***「以前からリーダーシップスキルは持っていましたが、YLAのプロジェクトでは私はリーダーでなかったため、あまり強化できませんでした」***と述べた。

ユースアンバサダーはYLA期間中、講習会やプロジェクトを主導する多くの機会を通して自身のリーダーシップ能力が徐々に高まったと述べた。そうした向上は、変化の積み重ねが実を結んだものと考えられる。多様な背景を持つ彼らが関わり合うことで、彼らは心を開き、違いを受け入れられるようになり、個人としてもリーダーとしても、他者に寄り添える包摂的な存在に成長することができた。ユースアンバサダー同士で協力しなくてはならないことで、彼らのリーダーシップに対する考え方も権威重視型から協働型へと転化し、リーダーがチームメンバーを指揮するだけでなく、メンバーから気づきや学びを得るようになる。地理的問題やスケジュール調整の難しさ、不可抗力等、プロジェクトの進行を妨げる多くの障壁の存在を彼らは口にしたが、プロジェクト設計・実施を協力して行うことがチームを団結させ、より柔軟で時間効率のよい意思決定につながった。そうした成長は彼らにとって、YLAでの成果としてだけでなく、仕事をする能力を高める上でもプラスになると考えられる。

ユースアンバサダーのリーダーシップの向上に見られる4つの側面

包摂性と共感力の向上

ユースアンバサダーは、皆の声に耳を傾け、包摂性を高め、皆が一翼を担えるようにする重要性を訴えた。多様な背景を持つメンバーとチームとして活動する環境に置かれることで、ユースアンバサダーは心を開き、他者に寄り添えるようになった。

指示型から協働型へ

実際のプロジェクト業務に携わり、様々な場所や文化を横断してチームで働くなかで、リーダーシップの形やチーム内の関係性が、指示型から協働型へと変化した。

柔軟な問題解決策

ユースアンバサダーは、連携の不備や時間管理の不備、グループの分裂等の問題を振り返り、それによって結果的に柔軟性とレジリエンスが養われたと見ている。

仲間とメンターからの学び

ユースアンバサダーは他のリーダーやメンターと関わるなかでリーダーシップの捉え方を学び、見ることが学びにつながった。ユースアンバサダーは仲間やメンターから刺激を受け、リーダーシップのあり方を学んだと語った。

ユースアンバサダーの回答から、志に燃えるリーダーやアドボケイトとして力強く変貌を遂げる成長ストーリーが明らかになった。あるユースアンバサダーは、YLAがリーダーシップスキルを実践し高める機会を数多く提供してくれたと語った。「以前は、グループを率いる経験が少なかったのですが、YLAで講習会の主導、キャンペーンの管理、仲間の士気を高める機会が得られました」。また別の者は、「私個人としては、チームを率いたり、ジェンダー・気候変動の問題に関してユースと協働する自信がつきました」と説明した。これらは、本プログラムが実際のプロジェクト管理を組み込んでしっかりと構成されていることと、シード助成金プロジェクトが彼らが実際に理論を実践に移す上で役立ったことを裏付けている。



「私個人としては、チームを率いたり、ジェンダー・気候変動の問題に関してユースと協働する自信がつきました。仕事面では、プロジェクト管理・調整・アドボカシーのスキルを習得でき、今後、社会的正義やユースのエンパワーメントに関わる仕事で大変役立つと考えています」

Ebi、インドネシア



「様々な国から集まった40人のユースアンバサダーと交流し、彼らのプロジェクトや課題、考え方を学ぶことで、国際的な協働を直に体験する機会が得られました」

Ekta、インド

さらにYLAは、指示型のリーダーから他者に寄り添い協働するリーダーへと、新たなリーダー像を育んだ。アジア太平洋地域から集った多様な背景を持つ仲間との協働により、ユースアンバサダーはより広い心を持って、共通目標を見失うことなく文化の違いを乗り越えて進んでいけるようになった。あるユースアンバサダーは、彼らのリーダーシップに対する考えがどう変化したかを語った。それは、仲間の話に耳を傾け、皆のエンパワーメントと協働で行う意思決定を権威よりも大切にする、包摂性の高いリーダーシップへの進化に他ならない。



「このプロジェクトを通して、リーダーはグループのメンバー全員が学べるよう、一歩引いたり、自由を与える方法を知るべきだということを学びました。プロジェクト調整等、何かを犠牲にしなければならない場面もあるでしょうが、その犠牲(調整)により、プロジェクトが多くの人びとに影響を与えるものなら、それを行うだけの価値があります」

Rex、フィリピン

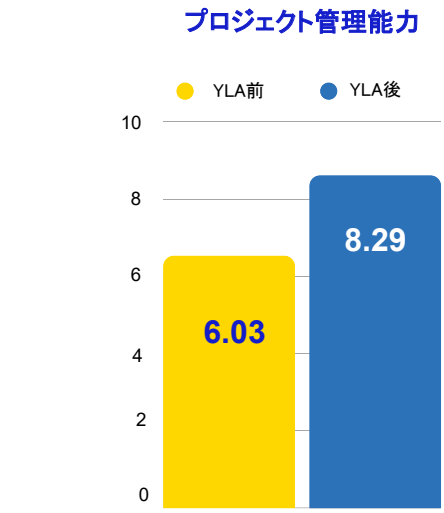
プロジェクト管理能力の強化

ユースアンバサダーのプロジェクト管理能力は大きな変化を遂げた。彼らの多くは、それまでに同様のプロジェクトに参加したり気候変動以外のプロジェクトやアドボカシーに関わった経験があるが、プロジェクト管理能力は自己評価で平均2.26ポイント上昇している。YLAは彼らが、現実の取り組みを管理する上で必要な知識、自信、リーダーシップ、実践的なツール、指導、リソースを効果的に提供できたと言える。

87%のユースアンバサダーが目に見えて向上したと報告した一方、わずかな変化しかみられなかったと報告した者も何人かいた。その内4人はすでに豊富な経験があり、当初の高いスコアを維持していた。また、コミュニティ運営やボランティア活動の経験がある者もいたが、39%がYLAで初めて本格的なプロジェクト運営を経験したと回答した。このデータから、全体としての向上がより一層大きな意味を持つことがわかる。

本プログラム開始前、ユースアンバサダーは自身のプロジェクト管理能力を10点満点中平均6.03と評価していた。YLAの修了直前に、その数値は8.29へと上昇し、当初と比べて2.26(37.4%)の向上がみられ、それは、YLAが気候変動やジェンダー関連の理論的な理解と実践的な応用の間にある溝を埋める役割を果たしたことを強く裏付けている。

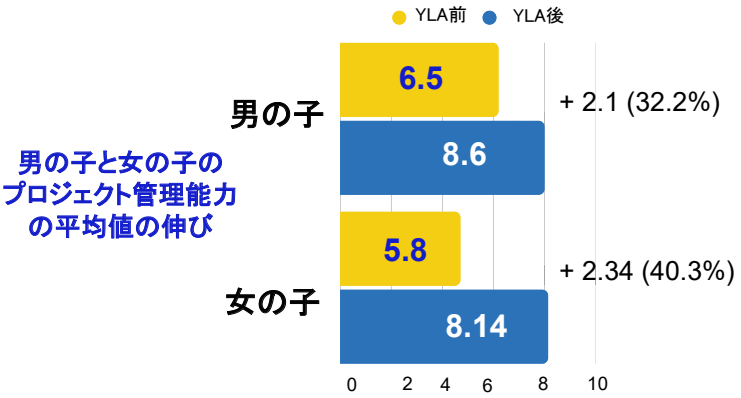
全体としては男の子のプロジェクト管理能力の水準は高いが、個人レベルでの女の子のプロジェクト管理能力の平均値は女の子が男の子よりわずかに高かった。女の子全体のプロジェクト管理能の平均値は、当初の水準である5.80から8.14へと40.3%向上した一方、男の子全体のプロジェクト管理能力は6.50から8.60へと32.2%向上した。





87%

のユースアンバサダーがプロジェクト管理が改善したと報告し、平均+2.26ポイント上昇(37.4%)。



自己報告と面談から、プロジェクト管理が特定の6つの領域で向上していることがわかった。YLAは、ユースアンバサダーに、各々のコミュニティでプロジェクトを設計・運営するための貴重な機会を提供したが、その経験により、彼ら、特にYLA参加前にプロジェクト運営の経験が乏しいあるいは全くない者は、プロジェクト運営の基盤となる能力が伸びた。本プログラムは、彼らが自信を持ってシード助成金プロジェクトを実施し、その目標達成ができるよう、助成金だけでなく、チームや業務をしっかりと管理するためのツールと指導も含めて彼らにリソースを提供した。リーダーシップ能力の向上に関する調査結果と同様に、彼らはプロジェクト管理では協働と仲間同士の学びが必須であると感じている。彼らは、個人として集団として、プロジェクトのためにできることを示した共通の枠組みに基づいて協力し合い、専門性の向上につながる知識と経験を積み上げていった。プロジェクト実施の際には、制御可能な問題であれ不可抗力なものであれ、多くの困難に直面したが、彼らは力を合わせて状況に適応し、困難を切り抜けるための決断を下し、目標に向かって前進し続けられることを証明した。



事例研究

インドのKanchanは、8～10年前、プラン・インターナショナルのスポンサーシッププログラムのチャイルドであった。成長するにつれ、彼女はコミュニティで多くの社会問題を目の当たりにし、それを機に社会的プロジェクトに携わり、将来はソーシャルワーカーになることを夢見るようになった。過去に、彼女はプラン・インターナショナル・インドのCEFMUやChildFund IndiaのGARIMA等、インド国内で複数のプログラムにボランティアとして参加したが、気候変動に焦点を当てた取り組みには関わったことはなく、短期間のものやイベントが中心だった。

「YLA参加前は、プロジェクト管理の経験がほぼありませんでした。今では、効果的にキャンペーンの計画、実行、進捗管理、記録を行えるようになりました」

YLAに参加して、Kanchanは自身のプロジェクト管理能力が大きく向上したと感じた。本プログラムは、彼女と他のユースアンバサダーに、多くの複雑な要素を含む10カ月間のプロジェクトを実施するよう促した。プロジェクトのソーシャルメディア・キャンペーンを管理しつつ、2つのコミュニティで仲間と共に活動を展開する中で、彼女はプロジェクト管理が実際の現場でどう活用されるかを学んだという。彼女の自己評価は、10点満点中5から9へ、80%という目覚ましい成長を報告した。

ユースアンバサダーのプロジェクト管理能力の向上に見られる6つの側面

プロジェクト運営の基盤となる能力	計画、実行、モニタリング、報告に至る、プロジェクトサイクル全体を管理する能力の向上
実施に対する自信	複数のユースアンバサダーが複雑なプロジェクトを管理する自信が新たに芽生えたと報告
組織開発・組織体制	多くのユースアンバサダーが時間管理や計画の実行について新たな方法を習得
経験を活かす力	ユースアンバサダーは、YLAのプロジェクト管理基準やツール、手法をコミュニティでの自身のシード助成金プロジェクトだけでなく、YLA以外で仕事をする際にも活用
チームのリーダーシップと調整	ユースアンバサダーは、仕事の任せ方、仲間の意欲を高める方法、チームの効果的な運営方法を学習
適応力と問題解決能力	ユースアンバサダーは、シード助成金プロジェクトの実施期間を通して予期せぬ問題に迅速に対応する方法を習得

「YLA参加前は、チームの中でも単独で仕事をしていました。このプロジェクトに参加して、効果的な運営とはチーム一丸となった取り組みであることを学びました」

Ekta、インド



具体的なプロジェクト管理能力に着目すると、ユースアンバサダーが最も向上したと報告した能力は以下の4つである。

1. 計画と時間管理: 優先順位事項を考えてバランスを取りながらスケジュールを設定する方法を習得
2. チームのリーダーシップと調整: 個人でプロジェクトを実施する形から協働型へ移行
3. 状況に応じた問題解決: 冷静で創造的な方法で混乱に対処し、問題を解決する
4. 組織として実施するためのツールの活用: ガントチャートやアジャイル手法等の枠組みの初導入

YLAは、プロジェクト管理能力の向上だけでなく、現実の世界での取り組みをプロ意識と他者に寄り添う気持ちを持って主導する自信をユースアンバサダーに植え付けた。体験型学習やメンター制度、協働を通して、彼らは、理論を学ぶ学習者から、各々のコミュニティで持続可能なコミュニティプロジェクトを設計または実施できる有能なプロジェクトリーダーへと成長した。





「YLA参加前は、きちんとプロジェクトを設計する力が私にはありませんでしたが、チームの仲間に刺激を受け、うまく計画を立て、効果的なコミュニケーションをとる方法を教えてもらいました」

Theresia、インドネシア

ユースの無限の可能性（知識と実践）

YLAが成功した根本的な理由は、やる気を能力として数値化できたことにある。本セクションでは、知識の習得と実践での活用に焦点を当てた「ユースの無限の可能性」の柱の下で実施された能力開発カリキュラムの効果を検証する。

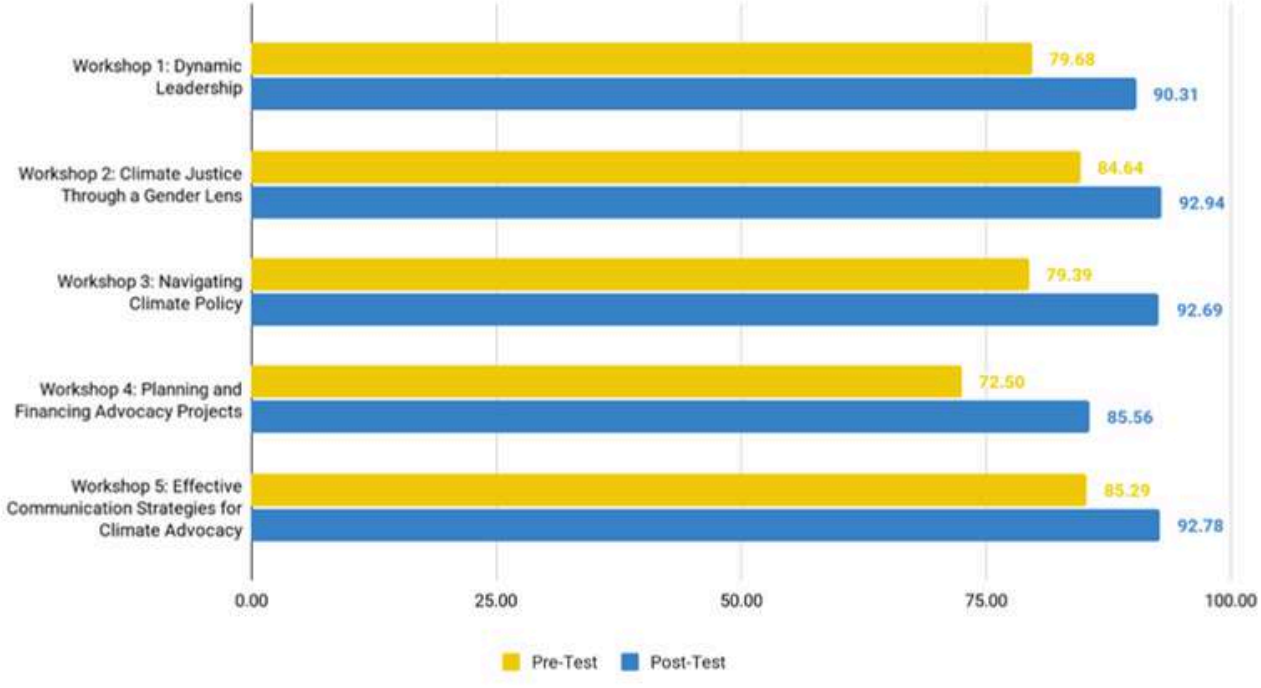
今回は、その変化を包括的に評価するため、私たちは2つの手法を併用した。ジェンダーの視点に立つ気候変動対策の主要概念の理解度を客観的に量的評価するために行う事前、事後テストのスコアと、新たなユースリーダーの内なる信念と主体性を把握するための自己申告形式の自信度調査である。「無限の可能性を持つユース」に自信と知識を兼ね備えた変革の担い手となるために必要な能力を身につけさせる上で、本プログラムが有効であるかどうかを、それらの包括的な手法を用いて確認する。

1. 知識の習得度(事前・事後テスト)

能力開発ワークショップの実施前後のスコアの比較により、専門知識の向上度を量的に評価した。



YLA能力開発ワークショップ全体での平均知識習得度(事前・事後テストのスコア)



各ワークショップによるユースアンバサダーの知識の習得度

ワークショップのテーマ	知識の平均習得度	能力の向上が見られたユースリーダー
ワークショップ 1: 行動するリーダー	10.64ポイント(13.35%増)	14人のユースアンバサダーが、気候変動やジェンダーに関する取り組みを主導する上で必要な知識を向上させた
ワークショップ 2: ジェンダーの視点で考える気候正義	8.30ポイント(9.80%増)	17人のユースアンバサダーが戦略的な事項に積極的に取り組み、目に見える成長を遂げた
ワークショップ 3: 気候政策への対応	13.30ポイント(16.75%増)	15人のユースアンバサダーが、政策とアドボカシーの複雑な仕組みについて理解を深めることができた
ワークショップ 4: アドボカシープロジェクトの策定・資金調達	13.06ポイント(18.01%増)	16人のユースアンバサダーが、計画策定やリソース管理スキルの習得で著しい成長を見せた
ワークショップ 5: 気候変動対策のアドボカシーに有効なコミュニケーション戦略	7.48ポイント(8.77%増)	16人のユースアンバサダーが、専門的な知識の応用力とスキルの最終的な定着度を向上させた

大多数のユースアンバサダーが着実な進歩を示した一方、一部では事前テストから事後テストにかけてスコアが低下しており、追加の支援が有効である可能性が示された。スコアが低下したユースアンバサダーの数は、ワークショップが進むにつれて徐々に増加し、ワークショップ1では1人、ワークショップ2と3ではそれぞれ2人、ワークショップ4では4人、ワークショップ5では6人だった。こうした傾向は珍しいものではない。内容が高度になるにつれて、参加者が自分にはまだ多くの学ぶべきことがあると気づくことがあり、これはダニング＝クルーガー効果と密接に関連している。こうしたスコアの低下は、参加意欲の低下を示すものではなく、自己認識が高まったことの表れである可能性がある。継続的な指導によって、ユースアンバサダーはこうした気づきをさらなる成長につなげていくことが期待される。

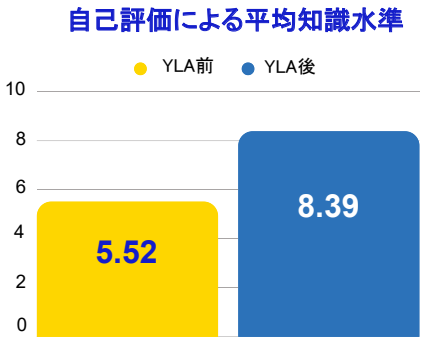


2. アンケートによる自信度の自己評価

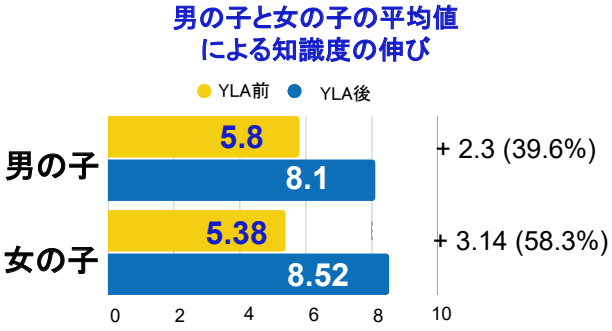
私たちは客観的なスコア結果に加えてプログラム実施前後の自己評価を用いて、アドボカシーやリーダーシップの重要な原動力となる、ユースリーダーの内なる自信を評価した。



100% **のユースアンバサダーが、自己評価で知識が増えたと報告。**



彼らの100%が知識向上を自己申告した結果を踏まえ、データは、女の子の伸びが最も大きく、平均5.38から8.52へと3.14ポイント(58.3%)の向上を示し、それは男の子の5.80から8.10への2.30ポイント(39.6%)の伸びより0.84ポイント高い。



ユースアンバサダーの平均スコアは2.87ポイント上昇し、知識水準は65.94%の伸びを示した。

YLA参加前、多くの参加者は、ジェンダーと気候変動に関する自身の知識を中程度(5から7)と評価していた。7人は低水準(1から5)に該当し、高水準(8から10)と評価したのはわずか2人だった。プログラム終了後には大きな変化が見られた。低水準に該当する参加者はいなくなり、中程度は6人に減少した一方、25人のユースリーダーが自身の知識を高水準(8から10)と評価した。これは明確な変化を示している。YLAは、参加者の専門的な理解を深めただけでなく、ジェンダー公正な気候変動対策についてアドボカシーを行い、活動を主導するのに十分だと参加者自身が考える水準まで、その知識を高めた。



事例研究

YLA参加前、Ventaは気候問題に関する基本的な理解しかしておらず、ジェンダー関連の知識はほとんどなかったため、異なる背景を持つ人びとと活動する際、何かが欠けていると感じることが多かった。YLAを通して、その状況は大きく変わった。専門家によるワークショップやメンタリング、仲間との議論、国際的な学習機会、現地でのプロジェクト実施を通して、Ventaは、ジェンダーと気候変動対策がどれほど深く結びついているか、また皆が気候変動の影響を受けているが、皆同じ形で影響を受けている訳ではないことを明確に理解するようになった。本プログラムを通して、Ventaは、なぜ女性や疎外された集団の方が大きなリスクにさらされているのか、なぜ包摂的な意思決定が必要なのか、またジェンダー的役割が脆弱性やレジリエンスをどう形成するかについて、理解を深めることができた。また、ジェンダーに配慮した活動の設計やプロジェクト管理、異文化間コミュニケーション、女性主導の議論の運営、包摂的な形でコミュニティを関与させるための実践的スキルも習得した。こうした経験により、Ventaは人前で発言する、文書作成を主導する、効果的に協働する、ことに対する自信が高まった。今では、Ventaはジェンダーの視点に立つ気候変動対策を求めて提言する力の高まりを感じており、すでに議論を主導する、仲間と知見を共有する、進行中の取り組みへジェンダーの視点を導入する、という形で、その新たな知識を活かしている。

アンケートとインタビューで明らかになった、知識の向上が見られる特定の領域

ジェンダーと気候変動の連関の理解	ジェンダーと気候変動問題に交差性があるという概念を深く理解できるようになった
ジェンダーや気候変動関連知識の実践での活用	コミュニティ活動、アドボカシー、プロジェクト実施を通して、概念を実践に適用する能力
気候正義と交差性の理解	人々に及ぶ気候変動の影響は、ジェンダー、社会的地位、地理的要素で異なる形になるということへの気づき



「気候変動の影響を受けるコミュニティでジェンダー的役割が脆弱性とレジリエンスにどんな影響を及ぼしているか、また効果的な気候変動対策になぜ女性の参加が必須なのか、[YLA]を通して学びました」

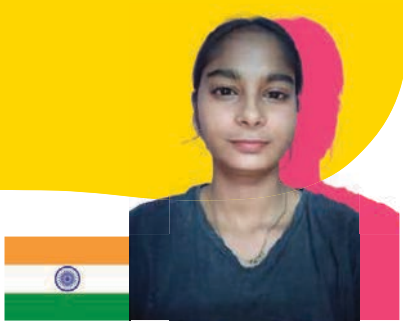
Zahra、インドネシア

知識スコアの全体的な向上に加え、アンケートとインタビューから、ユースアンバサダーは特定の領域で目覚ましく成長したことがわかった。彼らは、ジェンダーと気候変動が表裏一体の問題であるという概念を深く理解し、気候変動とジェンダー不平等がどのように作用し合っているかをわかりやすく説明する能力を身につけた。

また、彼らの多くが、コミュニティの取り組み、アドボカシー、プロジェクト実施を通して理論を行動に移しており、ジェンダー・気候変動に関する概念を実践へと落とし込む自信が高まったと報告した。加えて、本プログラムを通して彼らは、気候正義と交差性について理解を深め、ジェンダー、社会的地位、地理的要素によって人々が実際に感じる影響がどのように変わるのかについても意識が深まった。

「気候変動が女性や疎外された集団にどのように不均衡な影響を及ぼしているか、また包摂的な意思決定がなぜ必要なのか、実体験を通して学びました」

Sonia、インド



ユースの上げる声
（アドボカシーと働きかけ）

YLAは、ユースアンバサダーが積極的にアドボカシーに参加できるチャンスを広げることに全力を注いでいる。養成期間修了後、選抜されたユースアンバサダーには、気候変動関連フォーラムや他のアドボカシーに参加・運営する機会が与えられた。そうしたアドボカシーへの参加を通して、彼らは声を上げコミュニティの声を届け、自分の信念を主張する効果的なコミュニケーション方法を身につけることができた。フォーラムへの参加だけでなく、彼らは独自のアドボカシーを展開し、コミュニティに働きかけて前向きな変化を推進した。

アドボカシー活動への参加

YLAはすべてのユースアンバサダーが、国内、地域、国際的なアドボカシー活動に参加、あるいは運営できる形を見事につくり上げた。彼らからの自己申告に基づき、本プログラムは、彼らが5 種類のアドボカシー活動に参加できるよう、直接的あるいは間接的な形で支援した。以下に、YLAによって可能になった5種類のアドボカシー活動と参加の形に加えて、そこでの活動を報告したユースアンバサダーの人数を示す。それらの活動のシード助成金プロジェクトとの関連性の有無は様々である。

イベント	役割	ユースアンバサダーの人数
現地のコミュニティを対象としたワークショップ・セミナー	運営者	40
現場やソーシャルメディア上での公的なキャンペーン	運営者	40
現地・全国規模のイベント	講演者/パネリスト	15
現地・全国規模のメディアでのインタビュー	講演者	9
政府関係者や政策立案者との会談	アドボケイト	11

事例研究

YLAはユースアンバサダー全員に、アドボカシー活動に加わりプログラム外のイベントに参加できるようにするよう促した。私たちは、各人がYLAの内外で携わった活動の数を追跡した。特に突出して積極的に参加したのは4人で、それぞれが参加、あるいは運営協力に携わったアドボカシー活動は10以上に上っている。

1. Girish(インド): 23のイベントに参加
2. Kanchan(インド): 12のイベントに参加
3. Rex(フィリピン): 11のイベントに参加
4. Kevin(インドネシア): 10のイベントに参加



気候変動・DRRに関するフォーラムへの参加

YLAは、ユースアンバサダーに重要なイベントを経験したり参加するよう促したが、現状では、ユースアンバサダー全員を対象として一連の選考過程を経て選出されたユースアンバサダーのみが行っている。彼らの自己申告に基づき、YLAの後押しでこれまでに32人のユースアンバサダーが5つの対象地域や世界規模の気候変動フォーラムに、オンラインまたは対面の形で参加している。



イベント	年	主催者	参加者(ユースアンバサダー)	参加形式
APMCDRR Philippines	2024	UNDRR	2	対面
COP29	2024	UNFCCC	3	対面またはオンライン
AsiaXchange	2024	Rockefeller財団	2	対面
COP30	2025	UNFCCC	4	オンライン
Youth Leadership Summit	2025	プラン・インターナショナル	21	対面

地域規模または世界規模の気候変動関連フォーラムへの参加は、ユースアンバサダーにとって、YLAや自国を代表して、国際的な場でジェンダーや気候問題に関して発言する機会となった。APMCDRR 2024に参加したRexとStevilは、講演者として登壇した。彼らの使命は、プラン・インターナショナルの他の代表団員と共に、アジア太平洋地域の各国政府関係者、CSO、その他関係者に対し、女の子、男の子、ユースがアジアのDRRとレジリエンス強化の加速化に向けた取り組みに有意義な形で加わり、実現に向けた意欲を向上させる重要性について、働きかけと提言を行うことである。フィリピンのAiresとベトナムのNhiもAPMCDRRに参加したが、YLAの一員としてではなく、プラン・インターナショナル・フィリピンおよびプラン・インターナショナル・ベトナムの他のプロジェクトの代表者として参加した。

イベントに参加するための旅行に関する一切の手配と、会議で代表団が議論する内容の準備については、プラン・インターナショナルがサポートを行った。会議での発言に向け万全を期すため、プラン・インターナショナルは、子どもやユース主導の調査プロジェクトの成果について代表団員全員に説明を行った。出発から到着まで、プラン・インターナショナルが代表団員全員に安全な環境を確保した。

APMCDRRで、ユースアンバサダーは様々な活動について発言。彼らは気候変動に対するレジリエンスや防災で子どもとユース、ジェンダー、障害のある人それぞれが担う役割と置かれた状況について意見を述べ、議論を交わした。彼らのアドボカシーは話し合いのセッションに留まらず、彼らはそれらの問題に関して政府関係者や政策決定者に働きかけることができた。

ユースアンバサダーはただ一方的に働きかけただけではなかった。会議で講演を行うだけでなく、彼らは様々なことを学び、自身の現地コミュニティでの今後のアドボカシーに向けたひらめきやアイデアを持ち帰った。



「帰国したら、私のコミュニティ、特に市長に、今回学んだことをお伝えします」

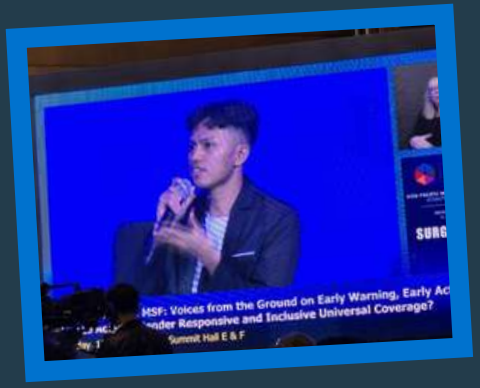
Rex、フィリピン



「様々な取り組みについて話される登壇者の方々から刺激を受け、インドネシアでどう実施され得るかを考えさせられました。会議期間中、ユースに安全な環境を提供してくれたプラン・インターナショナルに感謝します」

Stevi、インドネシア

ユースアンバサダー	セッション/活動
Stevi	災害レジリエンスを高める変革の担い手としての子どもとユース　政策、教育、イノベーションを通じたDRRと気候変動対策におけるユースのエンパワーメント
	気候変動に対するレジリエンス強化で障害のあるユースが担う役割
	明日に向けて共に - DRRと気候変動対策に取り組む子どもとユース
Rex	DRRと気候変動対策に関するジェンダー・トランスフォーマティブで包摂的な知識成果物
	早期警戒と早期対応に関する現場の声 - ジェンダーの視点に立った包摂的な支援をすべての人に届けるために
	アジア太平洋地域における早期減災行動(被害を最小限に抑えるために、予測される災害を先取りして行動すること)に関する地域対話
RexとStevi	国内および国際レベルのリーダーとの交流







タイ・バンコクで開催されたAsiaXchange 2024はRockefeller財団が主催する会議で、アジア各地のリーダーが一堂に会し、気候変動に対するレジリエンス、食料安全保障、保健、金融といった分野を中心に経済成長と持続可能な開発に向けた話し合いが行われた。プラン・インターナショナルは、この会議で一部の活動を共催し、2人のユースアンバサダーが参加。Tomokoは、気候変動とそのユースに及ぼす影響について10分間の動画で講演し、Honeyは、気候変動対策でのユースの役割について、世代間対話の次の段階として、気候変動に対するユースの行動喚起を訴えた。



COP29は3人のユースアンバサダーが、対面またはオンライン形式で参加した。タイのTomokoは対面参加者グループの代表を務め、インドのGirishとベトナムのKatはオンラインで参加した。Tomokoは、注目度の高いパネルディスカッションに参加し、メディアに向けた発信やハイレベル会議への出席、パビリオンでのタイ代表としての講演に加え、今後の協力を視野に他のユースリーダーとのネットワークづくりを行った。

アジア開発銀行研究所(ADBI)がKhazar大学で主催した「レジリエンス強化のためのユース・コミュニティ主導の気候変動対策」というセッションに、Tomokoは講演者として登壇した。また彼女は、ADBIのサイドイベントで自身の「Green Caviar」シード助成金プロジェクトについて発表し、ジェンダーや障害、気候変動には交差性があることに焦点を当てながら、気候変動に対するレジリエンス強化に向けてユースが協働する様々な戦略を紹介した。パネルディスカッション終了後、TomokoはADBIの広報チームのインタビューに応じ、気候変動の問題に対する、包摂的なユース主導の解決策の重要性を訴えた。

また別の機会に、TomokoはShe Leads、プラン・インターナショナル・ウガンダ、CARE Internationalの代表者らとともに、イギリスの開発担当兼女性・平等担当大臣との対話に参加した。翌日には、各パビリオンで開催された複数のセッションに参加し、気候変動に対するレジリエンスを高める上での持続可能性の重要性を訴えた。また、持続可能性をテーマとしたファッションショーに参加し、タイ政府の代表者らとも意見交換を行った。こうした経験は、国際外交でかけがえのないスキルを習得する機会になっただけでなく、なによりも、彼女たちが変革の担い手だということがしっかりと証明されたことに、最も大きな意味があった。

Tomokoは「COP29への参加は、素晴らしい機会でした…私は、自身のコミュニティの声を届けることができ…政策決定者に直接訴えかけることができました…」と話している。





COP30にはオンラインで4人のユースアンバサダーが参加し、有意義で実践的な知見を得た。同会議への参加を通して、彼らは世界的な気候変動対策や変革の推進におけるユースのリーダーシップの重要性に対する理解を深めることができた。彼らの振り返りから、気候変動対策を単なる環境問題としてではなく、公平性、レジリエンス、コミュニティの関与が求められる、人を中心に据えた問題として捉えることの重要性が明らかになった。また、適応ファイナンスや「公正な移行(公正かつ平等に持続可能な脱炭素社会への移行を目指す概念)」に関する議論で、脆弱なコミュニティが十分な支援を受けられるようにすることが改めて強く求められるなかで、ユースアンバサダーらは現地の防災力を高めるために教育がきわめて重要であると指摘した。そして、各セッションでは、地球規模の厳しい気候目標を達成する上で気候ファイナンスがきわめて重要であることが強調され、予見性と透明性の高い革新的な資金提供の仕組みの必要性が訴えられた。4人のユースアンバサダーは全体を通して、持続可能な未来の実現の推進には、ユースのリーダーシップ、包摂的な政策、強固な資金調達体制が必須であることを認識し、改めて湧き上がる希望と責任感を胸に帰途についた。

「COP30は、ユースが先頭に立つことには価値があり、世界中でユースリーダーが協力し合っていることを、改めて私に教えてくれました。たとえ小さくて取るに足らないような行動でも、自身のコミュニティを理解し、その一員として活動しようと努めれば、真の変化を生むことができるのです」

Linh、ベトナム



地域規模や世界規模の気候フォーラムに加え、ユースアンバサダーらはプラン・インターナショナル主催の5つのオンラインイベントに参加したり、人道問題を扱った地域協議会に対面で参加する者もいた。彼らはこうしたイベントに参加者として、もしくや司会者や講演者といった、様々な役割を担って参加した。

イベント	年	参加者(ユースアンバサダー)
The Ignite Corner Vol. 1 with Plan International Nepal	2025	12
The Ignite Corner Vol. 2 with The Youth Empowerment in Climate Action Platform (YECAP)	2025	12
APAC Learning Day	2025	2
Plan Global Climate and Resilience Network Meeting	2025	2
Bi-monthly APAC Humanitarian & Resilience Network Meeting	2025	2
Regional Humanitarian Partnership Week 2025	2025	1

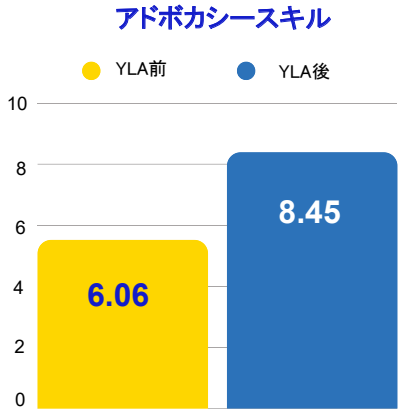
ユースアンバサダーが最後に参加した世界規模の気候変動フォーラムは、アジア太平洋地域RHPW(地域人道パートナー週間)だった。RHPWは、同地域全体から何百人もの人道支援専門家、CSOのリーダー、民間部門で活動に従事する者が一堂に会し、深刻化する問題や増加する災害に対して、連携の促進・好事例の共有・革新的な解決策の推進を目的として行われる重要なイベントである。12月8日から10日まで(本報告書執筆時は開催前)にタイの首都バンコクで開催されるRHPWには、YLAユースアンバサダーの1人TomokoとYLAプロジェクトマネージャーのRoykeも参加を予定している。彼らが登壇する予定の特別セッション「Children & Youth at the Heart of Resilience」では、同地域の各国で、子どもやユースがどのように気候変動対策やDRR、子ども主導の調査を主導しているかを中心に事例紹介が行われる。そのセッションで2人は、YLA とその8つのユース主導プロジェクトを紹介するとともに、YLA成果報告書を配布する予定である。彼らの参加を通して、YLAの存在感を高めると共に、ユース主導の気候変動やジェンダー関連の取り組みに光を当て、現地主導の包摂的で気候変動の視点に立った人道支援活動を推進する対話をすすめることで、同地域の人道的な共生システムの中に連携の輪を広げていくことを目指している。

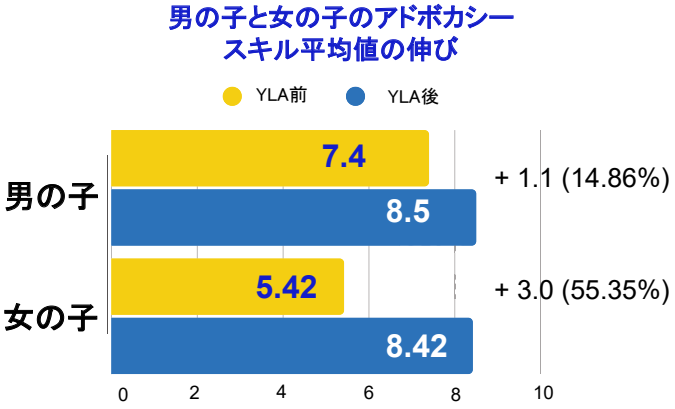


74.19% **がアドボカシースキルの向上を報告し、平均2.38ポイント(39.2%)の上昇がみられた。**

ユースアンバサダーの74.19%が、YLAに参加してアドボカシーのスキルが向上したと報告し、プログラム参加前後の自己申告でも、2.38ポイントの上昇が記録されている。比較的経験豊富な6人は、当初のアドボカシースキルの水準を維持していた。

男の子と女の子の間では、アドボカシースキルの伸びに大きな差が見られ、平均値で女の子は男の子のほぼ3倍の伸びを示した。男の子のアドボカシースキルの伸びは7.40から8.50への平均1.1ポイント(14.86%)に対し、女の子のアドボカシースキルの伸びは5.24から8.42への平均3.0ポイント(55.35%)となった。





ユースアンバサダーは、気候変動に関するフォーラムへの参加やアドボカシー活動の進行や実施といった経験を通して、アドボカシースキルのいくつかの面が向上したと報告した。彼らは、コミュニケーション能力がつくと、相手に応じて異なる方法を用いて明確なメッセージを効果的に伝えられるようになると述べた。また、ジェンダーと気候変動の交差性を理解することで、彼らはこうした問題について自信を持って発言することができるようになり、実際にコミュニティの講習会、啓発イベント、フィールドワークを企画したり参加したりすることで、自身のコミュニティで気候変動やジェンダー問題に関するアドボカシーを展開していくことができるようになった。そして、YLAによって彼らのネットワークは広がり、政府や政策決定者へ働きかける力が高まった。本プログラムは政府機関、役人、非政府機関で活動に従事する者と彼らをつなげ、彼らの声が届くようになり、政策決定へのユースの参加をすすめることができた。

ユースアンバサダーのアドボカシースキルの向上に見られる4つの側面

効果的なコミュニケーション	コミュニティ、同世代の仲間、行政関係者等、様々な相手に応じた、明確で柔軟なコミュニケーション能力の強化
実践的なアドボカシー	コミュニティ講習会、啓発イベント、フィールドワーク等、実際の状況の中でのアドボカシー活動
機関・政府との連携	政府・各機関で活動に当たる者との連携とアドボカシー活動の強化
交差性を踏まえたアドボカシー	ジェンダー平等や気候変動対策等、複数の要素が絡むアドボカシー活動の理解と実践

アドボカシーの強化

ユースアンバサダーの気候変動に関するフォーラムやアドボカシー活動への参加は、単なる形式的なものではない。彼らがそうした場で得た気づきや考えは具体的な提言へとまとめられ、世界レベルや国レベルの政策決定者に届けられる。そうした成果の積み重ねを通して、気候変動やジェンダー関連政策の策定での積極的なパートナーとしてユースの役割が確立されていく。

またYLAは、そうしたユースの声にハイレベルな場で強い力を持たせる役割を果たしている。2024年12月、YLAプロジェクトマネージャーのRoykeは、ユニセフ・インドネシア主催のオンラインイベント「COP29の成果の振り返り: 子どものために、そして子どもと共に体制のレジリエンスを強化する」で講演を行った。その中で彼はCOP29の主な成果を取り上げ、インドネシア政府を含む関係者に対し、ユース主導の取り組みをどうすれば効果的に支援し、ユースを意義のある形で気候変動に対するレジリエンス強化の取り組みに参加させることができるかについて提言を行った。



また2025年5月4日から5月7日まで、Roykeはイタリアのミラノで開催されたアジア開発銀行の第58回年次総会にYLAの代表として出席して講演者としてYLAモデルを紹介し、ユースが実際に主導し、政策に働きかけ、長期的な気候変動対策に貢献するための場を提供する重要性を訴えた。彼が総会に出席したことで、YLAをユースが地域全体で活動し政策対話に加わる信頼性の高い場所として位置づけることができた。

プロジェクト実施事例


SAFE for Climate and Gender
(Student Action for Environment)
SMAS Frater Don Bosco Lewoleba | Nusa Tenggara Timur

プロジェクト実施事例

YLAのシード助成金プロジェクトとは

YLAでは、専門家による講座とメンター制度の修了後、ユースリーダーにシード助成金を提供し、環境管理や気候変動対策に取り組むよう促した。インドネシア、ベトナム、インドには、各国毎に2件の、また、タイとフィリピンには各国毎に1件のグリーンプロジェクト資金が交付された。



助成金制度の仕組みとは

各シード助成金の額は2,000ドルで、YLAメンバーと協議して策定された既定の基準に基づいて配分された。その資金は、YLA メンバーが気候変動対策の取り組みの強化に重点を置いてグループで最低10カ月間行う活動の費用として提供された。

助成金の支給は2段階に分けて行われ、初回支給後の最初の3カ月は、予算管理や成果報告に関する技術的サポートやメンタリングが併せて実施された。また、各実施国に専任のユース担当者が配置され、プロジェクト期間を通してYLAメンバーに一貫した支援と指導を行った。



シード助成金プロジェクトの目的とは

こうしたユース主導の取り組み全体の土台であるセオリー・オブ・チェンジは、ユース(YLAメンバー)が彼らの知識とリーダーシップスキルを実践で発揮することが、自身のコミュニティ内でのジェンダーの視点に立った気候変動対策の実現につながる、というものである。変化をめぐるストーリーや実施のエビデンス等のアウトカム(具体的変化)は、YLSでの発表や今後のアドボカシーと取り組みの普及に活用できるよう、綿密に記録されている。



プラン・インターナショナルによるプロジェクトのモニタリング

YLAでは、メンタリング、定期報告、現地視察という3つのプロジェクトモニタリングの仕組みを導入した。各グループにはメンターが1人ずつ配置され、プロジェクト提案書の作成から実施までを支援した。メンターは各グループの所属国のプラン・インターナショナル職員で、プロジェクト管理やコミュニティ開発などの豊富な経験を持ち、ユース、ジェンダー、気候変動に関する課題にも精通している。シード助成金プロジェクトの実施期間中は、課題への対応、必要なリソースの調達、ネットワークづくりの支援、その他プロジェクトやチームの管理に関する事項について、グループのメンバーと継続的に協議を行った。

各プロジェクトグループには、実施期間の中間時点と終了後に、プラン・インターナショナルへ報告書を提出することが求められた。報告内容を統一するため、プラン・インターナショナルは共通の報告書テンプレートを提供した。報告書では、プロジェクトの目的、活動、達成事項、得られた学び、持続可能性に向けた計画を明確に示すこととした。以下では、提出された報告書に基づき、各プロジェクトの概要をまとめている。

また、プラン・インターナショナルは、現地での進捗を詳細に把握するため、シード助成金プロジェクトの実施地域を訪問した。現地視察では、各プロジェクトグループの活動を直接確認するとともに、メンバーやメンターとの対話を通じて、プロジェクト実施期間中の個人およびグループとしての成長の過程を把握した。さらに、プロジェクトの参加者から直接話を聞き、報告された進捗を検証するとともに、プロジェクトが参加者に与えた影響について意見を収集した。



YLAプロジェクトチームとメンターによる5カ国での現場訪問

選ばれたプロジェクトの現地視察には、プラン・インターナショナルのプロジェクトチームだけでなく、Rockefeller財団の代表者も参加した。2025年10月、同財団の代表者らはYLAプロジェクトチームとともに、気候変動やジェンダーに関するStudent Action For Environment(SAFE)プロジェクトが実施された高校の1つ、インドネシア・ジャカルタにあるSMAN 70を訪問した。その視察は、視察団がユースアンバサダーの活動を実際に見て生徒や教師と話すことで、YLAがシード助成金プロジェクトを通してどういう形で彼らの役に立っているのかを知る機会となった。

視察は、学校関係者への紹介から始まり、続いてプロジェクトチームによるプロジェクト発表が行われた。Ebiはチームを代表して、Rockefeller財団の代表者6人に、プロジェクトのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、プロジェクトの背景や目標、活動内容、進捗状況が発表され、プロジェクトで製作した物も紹介された。その後、プロジェクトチームは生徒や学校代表者と共に、校内にある高倉式コンポスト施設を見学した。訪問中には、プラン・インターナショナルから同校へ感謝の意を表す記念品の贈呈式も行われた。







プラン・インターナショナルとRockefeller財団のSMAN 70の視察、ジャカルタ、インドネシア

ユース主導の取り組み

The Green Caviar



ユースアンバサダー

1. Tomoko
2. Gun
3. Bas
4. Honey
5. Yah



シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

Green Caviar(ミジンコウキクサ)プロジェクトは、タイ北部の気候変動や食料不安対策として、ミジンコウキクサの栽培を推進する取り組みである。この二酸化炭素を吸収する、当該地域固有のスーパーフードは、異常気象に直面している農家にとって、レジリエントな解決策となる。現地コミュニティ、特に女性や高齢者に環境にやさしい農業を導入して小規模事業を立ち上げる力を身につけさせることで、本プロジェクトは環境面の持続可能性と栄養改善・経済成長を両立させている。



目標

1. タイ北部のコミュニティ住民の意識を高め、取り組みへの強い意欲を育てる
2. 販売を目的とした持続可能な食品生産を促進する
3. 沼地の藻類を対象とした、再現可能性のあるスマート農業モデルを開発する
4. 脆弱な集団に能力を身につけさせ、環境にやさしく持続可能な食の取り組みを導入する

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

Baan Nang Lae Nai村、Muang Chiang Rai郡、Chiang Rai県、タイ

対象者

Baan Nang Lae Nai村の現地コミュニティ住民、特に伝統的な農業プログラムで取り残されることが多い女性と高齢者

計90人の村人と34世帯

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
継続的なコミュニティ集会	自己紹介とプロジェクト説明、村人との質疑応答と意見交換
気候変動と持続可能な農業に関するNang Lae Nai村での研修ワークショップ	カードゲームを用いた気候教育を実施し、ミジンコウキクサの栽培方法を紹介するとともに、今後の販売を見据えたメニュー案を共有
ミジンコウキクサの試験的栽培	村人は研修受講後、小規模な栽培と管理を開始
栽培用器具の提供とフォローアップ	植え付け用具とトレイを提供し、コミュニティ住民が初めて植え付けを行う際に指導
第1回モニタリングおよび評価(M&E)	本プロジェクトは、ミジンコウキクサ栽培の進捗状況、課題、初期の成果を評価するため、参加した8世帯を対象に第1回M&E訪問を実施
調理実演と知識共有、第1回M&E訪問	プロジェクトの進捗を共有し、村人から意見を収集するとともに、他のユースリーダーと知識を共有し、次の栽培段階に向けた改善点を特定
第2回M&E訪問	栽培の進捗状況とコミュニティでの導入状況に関する追跡データを収集し、近隣の村々への展開に向けて得られた学びを記録



チームはBaan Nang Lae村で現地コミュニティ住民との集会を開いた。チームは、一方的に情報提供するだけでなく、村人の不安に積極的に耳を傾けた。多くの村人がミジンコウキクサの売り込み方や収益性に関して質問し、彼らが単なる興味を越えて、すでに持続可能性や収入創出に関して考えていることが伺えた。



Green Caviarプロジェクトの対象参加者との意見交換会。村人との集会で、プロジェクトチームは気候変動が脅威である一方で機会にもなることを強調し、湿地の藻類が森林と同等の速度でCO_2を吸収でき、しかも栄養価が高いと説明した。また、新たな収入創出源となり得ることも力説した。こうした進め方をすることで、地球規模の気候問題が農家の日々の不安と地続きの問題となった。



Green Caviarプロジェクトの最終的な製品の1つである、ミジンコウキクサ(ミジンコウキクサ)を粉末加工し、調味料の原料として使用できるよう包装したもの。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

知識不足の解消

知識の乏しかった村人がワークショップに参加して実際に作業することで、自信を持って栽培に取り組めるようになった。

食生活への導入

今では各家庭で肉に代わる健康的な食材としてミジンコウキクサが消費されており、ユースがそのメリットを積極的に広めている。

経済成長

参加者は現地やオンラインで製品を販売しており、最も成功を収めている2世帯は、週に最大12kgを生産し、安定した収入を創出している。

外部評価

本プロジェクトはYLSで紹介され、その持続可能性の価値に対し、プラン・インターナショナルから称賛を受けた。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



直面した課題	得た学び
調整上の問題 チームメンバーの在住地が異なり時差が存在したため、ミーティングの日程調整が困難だった。	明確な役割分担や信頼、柔軟性は、効果的なチームワークに必須である。頻繁な会議がなくても、常にコミュニケーションが取れていれば、着実に前進することができる。
国際的なチームとの言葉の壁 メンバーの多くがタイ語の使用の方が楽であったことが時に誤解を招き、調整の不備につながった。	翻訳サポートを活用したり明確でわかりやすいメッセージにする等、言葉の壁を見越した対応は、チーム全体の包摂性と共通理解を確実に高めることにつながる。
新しい手法に対する現地の人びとからの当初の抵抗 コミュニティ住民は、ミジンコウキクサの栽培が実際できるのか疑問視し、馴染みのない栽培に時間やリソースを投じることに後ろ向きだった。	コミュニティとの真の関係構築は傾聴から始まる。現地の視点を尊重し、共に解決策を見いだすことで信頼が高まり、参加が有意義で持続可能なものとなる。
知識と学習の格差 村人の中には、ミジンコウキクサの栽培や気候変動に関連する特定の生物学的、環境的概念を理解するのが難しいと感じる者もいた。	効果的に知識を伝えるには、相手の背景に合わせてコミュニケーションの形を変えることが重要である。概念を平易な言葉で対話をしながら説明することで、学習は誰もが参加できる魅力あるものとなり、より大きな成果をもたらす。
リソースの制約 チームには資金面の制約があり、必要なすべての資材や交通費や宿泊費を賄うことが困難だった。	事前に計画を立て、予算の20%を緊急用資金として確保しておくことはきわめて重要である。宿泊施設や航空券の早期の予約により、費用を大幅に抑えることもできる。

今後の計画と拡大可能性

Chiang Rai県で成功を収めた本プロジェクトは、同様の問題を抱える他の地域に展開する際のモデルとなり得る。本プロジェクトを通して開発されたスマート農業モデルは、食料不安や気候変動の深刻な影響を受けているメコン川流域等の地域にも適応、導入が可能である。コミュニティの能力構築と気候変動に対するレジリエンス強化に重点を置く本プロジェクトは、多様な地域の人々のニーズに対応しつつ、持続可能な農業活動と包摂的な経済機会を促進する取り組みであり、今後国内外で展開できる十分な可能性がある。

ユース主導の取り組み

The YouLEARN Project



ユースアンバサダー

1. Rex
2. Delson
3. Jonna
4. Criza
5. Aires



シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

ユース主導の自然環境対策プロジェクトであるYouLEARNプロジェクトは、YLAが活動する5つのコミュニティ全体に見られるゴミの不分別や焼却などの有害な慣行等、不適切なゴミ処理という深刻な問題に対応するために立ち上げられた。フィリピンTacloban市で毎日出される大量のゴミが示すように、ゴミ処理問題が手に負えない状況にあり、環境や健康上のリスクをもたらしていることから、本プロジェクトは多角的な手法を用いている: 持続可能な習慣に対する人々の理解を深める、啓発キャンペーンを主導するユースグループの能力を強化する、疎外されたユースにリサイクルを通して副収入の機会を創出する、地元自治体と協働してゴミに関する条例を強化する、といった方法である。より清潔で健康的、かつ経済力のあるコミュニティづくりを効果的にすすめることが、YouLEARNの目指す最終的な目標である。



目標

1. 適切なゴミ処理に関する参加者の理解を深める
2. ユースグループがゴミ処理キャンペーンを推進する力を身につける
3. リサイクルを通して、疎外されたユースの生計手段を創出する
4. ゴミ処理の取り組みで地方自治体との協働をすすめる

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

Tuban、Tagbacan、Cabalawan、Borongotan、Tanza1、フィリピン

対象者

小学生、高校生、不就学のユース、若い母親、PWDから成る11歳から30歳までの多様な100人

計 1,808人 (ユースと主婦)

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
ニーズ評価	ゴミ処理の実態に関するベースラインデータの収集
情報・教育・コミュニケーション資料の共創ワークショップ	
啓発講習会	Tuban、Tagbacan、Cabalawan、Borongotan、Tanza1でのー連のコミュニティ向け啓発講習会の実施
アートワークショップとアドボカシーキャンペーン	視覚教材の制作と共同制作、リサイクル素材を活用したエコワークショップ、資源回収施設(MRF)の設置
M&E	FGD(FGDと振り返り)
まとめの活動	プロジェクト終了後のイベントと報告



プロジェクトチームは、あらかじめ指定された対象地域全域でゴミ処理に関する啓発講習会を成功させた。こうしたコミュニティ主導の取り組みは、エンパワーメントと意識啓発が一緒に行われれば持続的な行動変容につながることをはっきりと示している。



本プロジェクトは、10代の母親を対象に実践的な技能訓練と必要な生計キットを提供することで、彼女たちに持続可能な製品を生産して自立を実現する手段と自信を身につけさせた。



10代の母親とユースは、ゴミをエコバッグや財布など機能的な製品、あるいはキーホルダーや植木鉢等の独創的なアート作品に生まれ変わらせて収益を生む活動に熱心に取り組み、その創造性を発揮した。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

経済的エンパワーメント

10代の母親が廃棄物を収入に変え、持続可能性の推進にもつなげながら、家計を支えられるようになった。

インフラの整備

新たに設置されたMRFは現在、リサイクル可能な物品の選別および保管の専用拠点として機能し、適切なゴミ処理が今後も継続していく体制が整えられている。

コミュニティのレジリエンス

一つ一つの具体的成果は、コミュニティが教育を受ければ持続可能な将来に向けた真の解決策を作り出せることを示しており、コミュニティが責任を担い革新を進めていける表われである。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



直面した課題	得た学び
複数のパートナーや拠点との連携 本プロジェクトの活動は5つの異なるコミュニティを対象としており、関係者、LGU、学校、ユース組織、専門機関との調整が求められた。	多様な集団との協力には、効果的にコミュニケーションをとることがきわめて重要である。協力を拒まれる場合は、代替案を検討し、常に新たな連携関係を模索し続けること。
時間と優先順位の管理 チームメンバーにはこの業務以外にも並行して行うべき仕事があるため、プロジェクト業務を優先して十分な時間を割くことが難しかった。	学生とユースアンバサダーとしての役割を両立させるには、時間と優先事項を上手く管理する必要があった。様々な状況への迅速な対応が、チームのすべての取り組みを高水準で遂行する鍵となった。
効果的な情報発信 参加者が機会やイベントを十分に把握していないと思われる場合があった。	対象者へのプロジェクトの周知はきわめて重要であった。参加者が、利用可能な機会やイベントに関して十分に把握しているとは限らなかったため、多様なコミュニケーション手段を活用して効果的な情報発信を行い、参加者を最大限に増やすことが成功の鍵となる。
実施目標の設定 様々な事情により、参加者の都合や会場の手配が当初の予定日直前に変更となることがあり、それにより、活動の遅延や日程変更が生じた。	プロジェクト開始前に、日程、時間、会場に関する複数の代替案を策定し、関係者に周知しておくこと。それにより、スケジュール上の予期せぬトラブルを軽減できる。

今後の計画と拡大可能性

熱意あふれるユースリーダーの起こした活動の勢いに乗り、本プロジェクトでは、環境意識の継続的な向上とコミュニティのゴミ処理問題を、ジェンダーの視点に立つユース主導の政策として現地の開発計画に組み込むことに全力を注いでいる。プロジェクトチームは、道具や資金へのアクセスと、市場とのつながりを向上させて、生計手段としてリサイクリングを広げていくと同時に、ストーリーテリングやアートといったクリエイティブな活動から学びを得て、持続可能な未来に向けて集団としてより広く活動を始め、社会に変化の波を広げていくことを目指している。

ユース主導の取り組み

SAFE



ユースアンバサダー

1. Ebi
2. Stevi
3. Alvian
4. Abdi
5. Venta



シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

気候変動はインドネシアにますます深刻な影響を及ぼしており、国内で発生する災害の99.35%が気候関連事象と関連している。なかでも女性とユースは、不平等、利用できるリソースの不足、意思決定への参加機会の少なさによって、特に脆弱な立場に置かれている。ジェンダーの視点に立った気候変動教育の必要性を踏まえ、Student Action for Environment(SAFE)for Climate and Genderプログラムでは、4つの段階を通じて、高校生が基礎から応用までの知識を身につけられるよう支援した。具体的には、5州の生徒250人を対象とした気候変動とジェンダーに関する研修とZINE制作、35基の高倉式コンポストの導入などの学校を基盤とした気候変動対策、全国規模の動画コンテスト、100人の生徒を対象とした表彰と対話のイベントを実施した。これらの活動を通じて、気候変動対策におけるユースのリーダーシップを強化し、ジェンダーに配慮した解決策を促進するとともに、学びを具体的な環境行動へとつなげた。



目標

全体的な目標として、高校生のジェンダーや気候変動対策に関する理解の深化と「スキル開発」能力の最大80%向上を目指した。

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

Pelaihari、Bulukumba、Bogor、ジャカルタ、Lembata、インドネシア

対象者

女の子が50%超、また特定の地域では他の疎外された集団の割合が各学校で最低10%、を占める15歳から19歳までの高校生

計625人

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
モジュール講座の実施準備	モジュール学習講座の開発
校内アンケート	つながりの確立と当初の学校データ収集
学校でのプロジェクト展開	250人の生徒が気候やジェンダー教育に関する講座を受講。現地の問題を題材にした気候変動やジェンダー関連のzineが50冊制作され、ジェンダーの視点に立った気候変動に関する生徒の知識が95%向上
Make Your Zine Come True (高倉式コンポスト施設の導入活動)	高倉式コンポスト施設の材料一式を35基分提供して、学校1校につき月35kgの有機ゴミを削減
EGCCコンテスト	高倉式コンポストに関するまとめ動画を5本制作、それらに対する「いいね」をソーシャルメディア「We.The.Safe」で210件獲得
授賞式	授賞式では気候変動やジェンダー関連の対話が進んだ。5つに対する称賛と高倉式コンポスト事業の継続のためのシード資金が与えられた
まとめの活動	プロジェクト終了後イベント(賞と記念品の授与)と活動報告書提出



本プロジェクトは、対象校の1校でTour De School講習会を実施し、気候危機とは何か、またその影響を女性がより重大に受けることが多いことを生徒に紹介した。



気候危機に関する理解を深めた後、プロジェクトチームは生徒にzineを製作するという「行動」を通して自身の考えを表現するよう促し、生徒は創造的で批判的な視点からそれらの問題に対する考察を深めることができた。



そして、意識の高まりを具体的な気候変動対策に移すため、プロジェクトチームは対象校の生徒と共に「高倉式コンポスト」を設置し、継続的に学べる体制を整えた。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

知識と意識の向上

生徒の気候変動やジェンダー関連の理解度が95%向上し、気候問題と社会的、ジェンダー的側面を結びつけられるようになり、50冊のzineの制作で洞察を深めた。

認識と行動の変化

生徒は35基の高倉式コンポスト施設を設置し、堆肥化活動を通して環境に配慮した習慣を身につけた。それにより、学校のゴミは月35kgの削減を達成し、プロジェクト終了後もそれらの取り組みを継続している。

ユースの参加とリーダーシップの強化

生徒はデジタルメディアを活用して気候変動やジェンダー問題に関するアドボカシーを行い、視聴者の心を動かす動画を5本制作してソーシャルメディア上で1.1K超の反応を得て、リーダーシップスキルを向上させた。

コミュニティの強化と連携

授賞式を通して、生徒と教師の間のつながりが一層強固になり、コンポスト施設維持のためのシード資金が提供され、気候変動やジェンダー関連の取り組みを主導する生徒の自信が高まった。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



チーム内コミュニケーション

メンバー各人のスケジュールが異なることと、基盤となるコミュニケーションに関する標準作業手順書がないことで、メンバー間の調整に困難が生じ、プロジェクト実施時のチーム内コミュニケーションに大きな課題があることがわかった。

円滑なコミュニケーション戦略の構築には、スケジュールを立て、互いの進捗状況を把握することが重要であり、それによってプロジェクトの効率的な実施が可能となる。

対外コミュニケーション

プロジェクトチームは対外コミュニケーション、特に初期段階で理解と信頼関係を築き関係者の関心や理解を調整する際も困難に直面した。

学校のニーズを理解し、それをプログラムのなかで最適な形で実現することが、プロジェクトの成功には必須である。

今後の計画と拡大可能性

今後、SAFE for Climate and Gender programプロジェクトが長期的な取り組みとして確実に活動を広げていくためには、しっかりとしたユース卒業生ネットワークを築いて、共同プロジェクトとして資金提供の申請や共同でのアドボカシーキャンペーン等、具体的な活動を通して協力関係を築いていくと同時に、積極的なソーシャルメディア展開を行って機会を周知し、セミナーを運営し、誰もが自由に利用して他の地域でも導入できる形でSAFEのモジュール講座を集積する必要がある。ユースを重視したさらなる資金提供を確保する積極的な取り組みも合わせ、こうした総合的な戦略を採ることが、メンター制度やリソース共有におけるパートナーとして、卒業生の力を高めていくことになる。

ユース主導の取り組み

EcoVibes Project



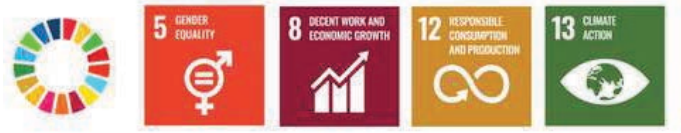
ユースアンバサダー

1. Cavin
2. Gita
3. Fafa
4. Theresia
5. Zahra

シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

インドネシアで深刻化する気候変動問題と危機的状況にあるゴミ処理問題に取り組むため、不均衡な影響を受けている女性とユースに包摂的な環境活動を主導する力を与えるプロジェクトがEcoVibesである。本プロジェクトは、女性は家庭内の行動変容の重要な推進者、また、ユースは革新者であることを踏まえ、循環経済とグリーンジョブでの就労準備に重点を置いた参加型ワークショップとアドボカシー、技能訓練を通して、都市部または地方部のコミュニティで活動を展開している。ジェンダーと気候変動に関する国家行動計画に沿い、EcoVibesは気候変動に対するレジリエンス強化、リサイクル率向上、ジェンダー平等を同時に強化するため、LGUとコミュニティとの連携を促進している。



目標

1. (ゴミの分別や再利用可能製品の使用等)持続可能性を高める基本的な取り組みの普及率を30%から40%までに引き上げる
2. 本プロジェクトは、「プロジェクト参加前」と「後」で気候変動に関する参加者の自己評価による知識を向上させることができ、自身の知識のスコアを5と評価した参加者の割合が目覚ましく上昇した

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

North Jakarta、East Jakarta、Bandung City、Cianjur Regency、Anambas Islands、インドネシア

対象者

ジャワ島とスマトラ島全域で各プロジェクト対象の村に暮らす現地コミュニティ住民、特に社会経済的に恵まれない状況にいる子どもやユース、女性(15歳から24歳まで)

計380人のコミュニティ住民

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
プロジェクト準備	研修教材、モジュール学習講座、調査ツールの開発と、プロジェクトを確実に効果的に展開するための関係構築とコミュニケーション戦略の確定
プロジェクトチームの導入	コミュニティ住民へのアンケート調査の実施、許可手続き、初回のプロジェクト実施に関する集会の開催といった、プロジェクトチームの役割と責務をはっきり示すための導入活動
気候変動に対するレジリエンスとゴミの見直しに関するワークショップ	5つの対象地域(North Jakarta、East Jakarta、Bandung City、Cianjur Regency、Anambas Islands)で、気候変動に対するレジリエンスと廃棄物の捉え直しをテーマとしたワークショップを計10回実施
政策対話	5つの対象地域(Bandung、Anambas、East Jakarta、North Jakarta、Cianjur)で、計5回の政策対話を実施
まとめの活動	報告・まとめ



プロジェクトチームは、「気候変動に対するレジリエンス」と「廃棄物の捉え直し」をテーマとするワークショップを計10回実施し、North Jakarta、East Jakarta、Bandung City、Cianjur Regency、Anambas Islandsの各コミュニティで、気候変動への意識向上を図った。



寄付されたベッドリネン3kgを再利用してエコプリント生地を作り、アナンバス地域の参加者と共に、環境にやさしく耐熱性のあるマットを縫製した。



Climate Fresk Indonesiaと協力し、プロジェクトチームはBandung市地域で開催された気候変動レジリエンスに関するワークショップで、参加者が気候変動の原因と結果を考えるゲームカードを導入した。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

深い気づきと意識の変化

参加者は、これまで単に災害と捉えていた気候変動を、それをもたらす大局的な原因を理解するまでに進化し、社会のお荷物だったゴミをエコプリントのように循環経済の機会につながる価値あるリソースとして捉え直すことができるようになった。

草の根の取り組みと長期的な社会的影響

参加者の意欲の高まりは、直ちにコミュニティでのリーダーシップ発揮につながり、参加者は家庭ゴミの処理習慣を取り入れ、ソーシャルメディア上のキャンペーンやゴミ銀行との提携といった自主的な取り組みを始め、それらが、持続的な取り組みの基盤を築いた。

エンパワーメントと戦略的連携

日々体験している「二重の脆弱性」を政策対話へと結びつける力を身につけ、その結果、包摂的な意思決定の場と、LGUやNGOとの強固な連携を一致団結して求める動きが生まれた。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



直面した課題	得た学び
地域間格差 島嶼部や都市部といった、地域毎の状況が多様であったため、調整・実施にばらつきが生じた。	緊密に調整を取り共通のツールを活用することで、各現地チームは、同じ目標の下で結束を保ちながら現地の状況に適応することができた。
リソースの制約 5つの地域で並行してワークショップを実施するには、時間、予算、ボランティアの人手が不足していた。	リソース不足は革新を生む可能性があり、持続可能性は現地で調達可能なものから生まれる。
知識の格差 対象となる各コミュニティで、気候変動やジェンダー問題に対する認識レベルに差があった。	有意義な学びは、単なる情報ではなく、実体験を通して人びとがつながったときに生まれる。
コミュニティの意欲の維持 ワークショップから政策対話まで、参加者の意欲の維持が求められた。	取り組みは1つの過程であり、継続的なつながりが当事者意識と長期的な影響力を生み出す。

今後の計画と拡大可能性

EcoVibesは、現地での一つ一つの活動を国レベルの対話に結びつけることで、コミュニティを中心に据えたユース主導の取り組みとしての勢いを維持していこうと全力を注いでいる。その中には、活動後もメンタリングを行い学校やNGOとの連携を強化してコミュニティとの取り組みを継続し、エコプリントやマングローブの再生等の成功事例を他地域にも広げていくことも含まれる。その戦略は、誰もが自由に利用できる知識共有手段を提供し、対話での提言に基づく包摂的なゴミ対策・気候変動対策を積極的に求めていくことで、より強固なものとなる。そして、女性とユースリーダーの全国的なネットワークの下でインドネシアの多様なコミュニティが団結し、持続可能で包摂的かつ再現可能な形で環境問題を解決する方法を共に見つけ出す一これこそが、戦略の目指す究極の姿である。

ユース主導の取り組み

Safe Steps Project



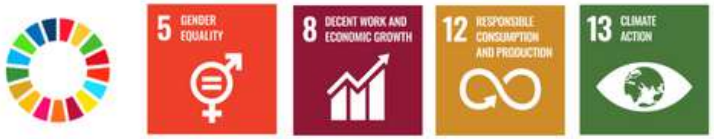
ユースアンバサダー

1. Kat
2. Nhi
3. Thu
4. Linh
5. My

シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

本プロジェクトは当初、ユースリーダーは利用できるリソースや発信の場が限られているために環境や社会問題に関するユース主導の取り組みを拡大できないという現状の打破を目的としていた。その目標の柱が、理論と実践を組み合わせたワークショップによる大学生のエンパワーメントであった。その後大きく方向転換し、ユースの声を高め、気候変動問題に関する実践可能な行動指針をリスナーに提供するため、質の高い音声コンテンツをユース主導で製作する活動に移行した。



目標

1. 高い包摂性の構築: 包摂的なリーダーシップとレジリエンスの文化を育むため、高校生の参加者全員に気候変動適応策や防災に必要なスキルを習得させる
2. コミュニティの取り組みの推進: 生徒がリーダーとして活動に積極的に取り組み、公平なレジリエンス戦略を実施して学校とコミュニティのつながりを強化していく力を身につけさせる
3. 拡大可能性の保証: 活動で得た大切な学びを記録し、プログラムを他の場所でも広く再現するために、誰もが利用できるツールキットを開発することで、持続可能な知識の基盤を確立する

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

Thien Loc村とDong Anh県、ハノイ北部、ベトナム

対象者

本プロジェクトの対象者は450人で、その大多数はThien Loc村とXuan Non小学校の生徒(5年生)とユース(12歳から22歳まで)であるが、ベトナムユース気候変動対策行動週間にオンラインで参加した全国のユースも含まれた。

計450人のユースが研修を受けた

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
導入	プロジェクトの事前計画、目標、期待される成果、ワークショップのカリキュラム、研修の枠組みの作成(初稿)
計画	Thien Loc村とXuan Non小学校との連携、ワークショップの授業計画の改善、広報資料とアウトリーチ戦略の作成、M&Eツールの整備
プロジェクト実施	Thien Loc村での対面式のワークショップおよび子ども向けの安全教育講習会、ベトナムユース気候変動対策行動週間 2025の期間中に1回のオンラインワークショップを実施
まとめの活動	参加者からの振り返りの収集や彼らの学習評価、本プロジェクト拡大に向けた知見と課題、提言を文書で記録



本プロジェクトの一環として実施された主な活動の1つは、ジェンダー比が均衡した100人のユースを対象としてThien Loc村で実施された終日の研修ワークショップであった。そのワークショップでは、防災に関する基礎知識の習得と、洪水発生率の高い地域に及ぶ気候変動の影響に関する意識喚起に重点が置かれた。



プロジェクトチームはXuan Non小学校を訪問し、危険の見極め方や気象警報の読み方、非常用キットの準備、洪水発生時の安全行動、家族との連絡という5つの基本スキルを指導した。



Thien Loc村のユース向けに制作された防災小冊子には、基本的な防災対策について手順を段階的に示した解説や家庭用安全チェックリスト、非常用持ち出し袋の準備方法、現地の危険事項に合わせた実用的なアドバイスが掲載されている。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

気候変動問題に対する理解の深化

参加者は、気候変動を目に見える災害という認識から、消費や政策が構造的に引き起すものだという認識に変わり、一連の講習会の終了時には85%が人々の行動が果たす役割を受け入れるようになった。

ジェンダー・ユースの視点の強化

沿岸部や都市部に住むユース女性は、自身の抱える「二重の脆弱性」をはっきりと述べ、自分には家庭ゴミの処理に関する個人的な経験を広範な政策対話に結びつける力があると感じられるようになった。

行動と考えの変化

行動意欲が著しく高まり、防災に対する備えと、ゴミの分別や植樹等を具体的な習慣として定着させる行動に40%の改善が見られた。

コミュニティ主導の新たな取り組み

参加者の独立したソーシャルメディア・キャンペーンの展開やゴミ銀行との提携、現地の組織との創造的なリサイクルプロジェクトでの協働の中から、草の根のリーダーシップが現れ始めた。

連携意識の強化

本プロジェクトでの対話を通してLGOやNGOと新たなつながりができ、参加者の中には、物質的支援や包摂的なアドボカシーの場を確保するために彼らとの連携を求める強い欲求が生まれた。

ゴミを機会として捉え直す

エコプリントのような実践的なワークショップにより、社会のお荷物だったゴミを、創造的・経済的な機会をもたらす貴重なリソースとして捉える考えへ、人びとの認識の転換に成功した。

長期的な社会的変化

本プロジェクトは、利用可能なツールと対話があれば気候変動対策を個人レベルで実現できることを示すことで、気候変動に関する今後のユース主導の取り組みを支える基盤を構築した。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



災害発生

Xuan Non小学校でのワークショップ開催予定日のわずか数週間前に地域一帯が激しい嵐により浸水した。学校は休校を余儀なくされ、プロジェクトチームも活動の延期を強いられた。

災害多発地域での活動には、柔軟性と現地のパートナーとの緊密な連携が求められる。緊急事態は、DRRプロジェクト実施中でも発生し得るため、計画は状況に柔軟に対応できるものでなければいけない。

知識不足

参加者の多くは、非常用持ち出し袋について聞いたことがなく、また、災害時のジェンダーによる脆弱性も知らなかった。それらは、彼らにとって、時には驚くほど新しい考え方だった。

ユースによる効果的な取り組みには、明確なコミュニケーション、実際の事例、実際に体験できる活動が求められる。学びが得られると感じられれば、ユースは自信が持てるようになり、行動への意欲が高まる。これは、小学生などの幼い子どもの場合特に顕著である。

今後の計画と拡大可能性

本プロジェクトは、ベトナムのユースが災害への備えをすすめる差し迫った必要性を踏まえ、フエ市の洪水被害を受けた地域の小学生200人から300人までを対象に大規模研修を実施して、直ちに活動を拡大する予定である。また、この取り組みを長期的に持続可能なものにするため、本プロジェクトは、専任のボランティアチームの構築とコミュニティとの連携強化に重点を置いて災害への備えを国全体に促し、ベトナム全土にレジリエンスの文化を育むユース主導の活動に発展していくことを目指している。

ユース主導の取り組み

Future Green Warriors Project



ユースアンバサダー

1. Hai
2. Kim
3. Monika
4. Trinh
5. Tuan



シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

「環境コミュニケーション」のプロジェクトである本プロジェクトは、ベトナムの気候変動活動の欠陥を補うため、ユース主導のベトナム語ポッドキャストシリーズを提供して人々が専門家と同様にユースの声に耳を傾け、また、ユースが実践的で実施可能な指針を得ることを目指して立ち上げられた。。専門家が製作した4つのエピソードを発信することで、本プロジェクトは、グリーンキャリアや都市計画等のテーマについて、Z世代の多様な視点と専門家の知見を巧みに融合させた「実践可能な学び」の提供に成功した。それによって、気候変動への懸念は気候変動対策のリーダーシップへと変容し、深刻な気候変動に対するベトナムの脆弱性に取り組むために必要な知識と能力を備えた世代を育成した。



目標

気候問題に関するユースの声の力を高めて、ユース活動家と各領域の専門家との間に存在する格差を埋め、リスナーが日々の生活で実践可能な具体的な行動指針を示す、全4回のポッドキャストシリーズ(「Climate Rebels」)の制作・配信

支給された助成金

2,000ドル

対象地域 ホーチミン市(サイゴン)、ベトナム

対象者

本プロジェクトの対象者は、1エピソード毎に推定500人強のリスナーであり、彼らは主に学生やユース気候変動アクティビスト、グリーンキャリア部門の新進リーダー、ジェンダーの視点に立つ気候変動対策を求めて提言を行う女の子とユース女性を含む、16歳から28歳までのベトナムのユースだった。

計500人超のリスナーにリーチ

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
企画と準備	ビジョンの確定、エピソードのテーマの決定、ゲストリストの確定、スタジオと制作チームの確保、打ち合わせ資料の準備
気候変動関連テーマ(リーダーシップ、ジェンダー、グリーンキャリア、都市計画)に関する調査	背景調査資料、専門家の参考資料、各エピソード向けに起草された「実行可能な学び」
脚本執筆とコンテンツ開発	司会者の台詞、重要な質問事項、話の流れを盛り込んだ4本の完成台本と承認済みエピソードの概要
ゲストへのインタビュー、スタジオでの録音と録画	エピソード1～4の全音声の収録と、収録の裏側の写真および動画の撮影
編集、調整、仕上げ	音声ファイル(各45±5分)の完成、4K動画の編集、ティザー動画の収録
エピソード1～4の配信とオンラインでの宣伝	4エピソードすべての公開、YouTubeプレミア配信の実施、ソーシャルメディア・キャンペーンの実施



環境コミュニケーション: Green Vietnamの創設者、Nguyen Ngoc Anhとの気候変動に対するユースの行動に関する対話。彼は、小さな環境保護活動をベトナム全土で10万人超のボランティアが参加する運動へと発展させた。



環境コミュニケーション: Trieu Thanh Thinhとの、現在の気候変動の状況下での持続可能なキャリアに関する対話。彼は、人材開発や持続可能な戦略の事業への統合に関して8年以上の経験を有する、MWGの環境、社会、企業統治とリーダーシップ、開発のマネージャーである。



環境コミュニケーション: メンタルヘルスに関するカードゲーム開発という先駆的プロジェクトであるSeeSaw Vietnamの創設者、Dao Hai Nhat Tanとの激動の時代における心の安定の保ち方に関する対話。彼女のスタートアップ物語は、心のケアが個人の成長に留まらず、コミュニティ全体に変革を生み出すことを裏付けている。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

気候リテラシーと心のウェルビーイングの向上

本プロジェクトは、ユースの気候リテラシーの向上と共に、気候不安や心のウェルビーイングに関する対話がごく当たり前に行われる環境を作って彼らの精神的レジレンスを強化し、リスナー一人一人が自分の気持ちは理解されていると感じ、より健全な方法で対処できるよう促した。

行動への移行と就労準備

意識は実践的な取り組みを通して具体的な行動に移され、その結果、小規模な気候変動対策チームの結成やゴミ・ゼロの取り組み実施へとつながった。それは、グリーンキャリアの周知を広くすすめると同時に、ユースの中に気候変動対策関連の仕事に就くために常に新しいスキルを身につける動きを促した。

主体性の向上と仲間とのつながりの強化

本プロジェクトは、ユースを中心に据えた新たな場を創出して、気候変動に関する議論での女の子とユース女性の主体性を高め、同世代の参加者の間の結束と帰属感、そして共通の目的意識を強化した。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



直面した課題	得た学び
プロジェクトの遅延 開始が予定より4カ月遅延(予定では2月だったが実際は6月)	スケジュール変更時は、状況の明確な把握および優先順位づけが必須となる。中核目標からずれることなく迅速に適応できれば、ユースチームは上手くいく。
プロジェクトの再構築 プロジェクトチームは、本プロジェクト実施場所に関する政府の規制変更を受け、プロジェクトの再設計と再開のために大幅なチーム調整を強いられた。	小規模なチームは規模より献身度を重視して、信頼・説明責任の共有や迅速な意思決定を活用しつつ、状況の変化に応じて解決策を見直す柔軟性をリーダーシップの中核的スキルとして発揮することで、優れた成果を生むことができる。
業務量の管理 (サイゴンと外国の)2つの拠点で、たった2人のメンバーが重い業務量をこなしながら高品質なコンテンツの提供を維持していた。	社会的変化を生み出すために必要なのは大規模なチームや巨額の予算ではなく、明確なメッセージと誠実さこそが取り組みに最大の力を与える。
取り組みの継続 困難な再編期での、ユースを中心に据えた取り組みの継続	コミュニティの取り組みは一貫性と信頼性の上に育まれ、たとえ小さくても確かな交流の積み重ねが信頼関係を築く。

今後の計画と拡大可能性

本プロジェクト「Climate Rebels」は、長期的な社会的変化を確実にもたらすため、今後メコンデルタ地域のユースのエンパワーメントの場であるMekong Youth Policy Labに戦略的に移行し、移行後直ちにコミュニティの零細プロジェクトや地域研修の資金として2,000ドルのGreenheart助成金の提供を受ける予定である。この移行により、メコン地域の現地の声と適応策の事例を取り上げるシーズン2で、より深い取り組み方が可能になるため、最終的には気候変動に関するベトナムのユースの全国的なコミュニケーション・ハブとなることを目指している。

ユース主導の取り組み

Green Voice for Sustainable Future Project





ユースアンバサダー

1. Sanjana
2. Ekta
3. Kanchan
4. Muskan
5. Deepti

シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

本プロジェクトは、約20万人の住民が暮らすデリーの都市スラムや開発の遅れた地域(Holambi KalanとMangolpuri)における根深い環境問題に取り組むものである。主な課題には、不適切な廃棄物管理、使い捨てプラスチックへの過度な依存、緑地の不足などがある。こうした問題は、熱波や洪水、大気の質の悪化といった気候変動の影響に対する脆弱性をさらに高めている。本プロジェクトは、社会的に取り残されたユース(13歳から24歳)に、草の根レベルの気候変動対策やポイ捨て防止活動を主導するために必要な知識と活動の場を提供し、地域の環境活動におけるリーダーシップを育むことを目指している。



目標

1. MangolpuriとHolambi Kalanで、草の根の環境関連の取り組みやコミュニティ運営に向けたユースのリーダーシップの育成
2. ワークショップ、清掃活動、植樹キャンペーンを通した持続可能な習慣の推進
3. 布製バッグへの移行、堆肥化ワークショップ、ポイ捨て防止キャンペーンを通した、プラスチック汚染問題への取り組み
4. 週毎の挑戦とオンラインコンテンツを配信する「Act for Earth」キャンペーンを通した、世界中の視聴者への働きかけ

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

デリー北部のHolambi Kalan、デリー北西部のMangolpuri、インド

対象者

本プロジェクトは主に、ユースが環境教育を受ける、リーダーシップを発揮する、安全な公共スペースを利用する、機会が多くの場合ほとんど与えられていない、Holambi KalanとMangolpuriに暮らす14歳から24歳までの思春期の若者とユースを対象とした。

1,911人のユースとコミュニティ住民が参加

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
Holambi KalanとMangolpuri でのソーシャルメディアの立ち上げ とベースライン調査	プロジェクトページを立ち上げ、約9,890人にリーチ。フォーム70件を回収し、コミュニティ住民150人から200人にリーチするとともに、現地の課題に関する知見を収集
本プロジェクトのスタートとなる 一連の講習会「気候変動対策を 推進するユースリーダー」	86人のユースが参加し、持続可能な生活への誓いを立て、現地の問題に関する議論を実施
ジェンダーと気候変動対策関連 講習会	60人のユースの、気候変動が及ぼすジェンダー的な影響に関する学びとグループ発表の実施
アースデイ清掃と植樹キャンペーン	15本の苗木の植樹および整備と50 kgから60kg程度のゴミの収集に30人から35人程のユースが参加
ソーシャルメディア・キャンペーン	3件の投稿で3,809人にリーチ
清掃活動、植樹、Mangolpuri でのNukkad Natak(路上劇)	300人超のコミュニティ住民に働きかけ、50 kgから60kg程度のゴミの収集、15本の苗木の植樹、路上へのゴミ箱の設置を実施
Act for Earthキャンペーン実施 (Holambi Kalan)と 創造力コンテスト	路上劇の公演と4つの創作コンテストを実施し、コミュニティ住民70人から80人程が参加
ゴミ管理に関する講習会	7種類のゴミに関する学習と家庭ゴミのマッピングにユース40人が参加
持続可能な生活に関する講習会	環境関連のオンライン活動、行動計画の策定、持続可能性に対する誓いの表明にユース65人が参加

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
ソーシャルメディアでの取り組み、ユース主導の小規模な取り組み、ポイ捨て防止キャンペーン	課題に対するデジタル環境での取り組み、コミュニティへの啓発活動の継続
ポイ捨て防止キャンペーンの一環で壁画制作を実施	啓発を目的とした壁画製作で500人超の住民の意識が向上
清掃活動、植樹、啓発集会	苗木10本の植樹にユース45人が参加し、コミュニティ住民400人から500人程にリーチ
まとめの活動と後続活動	ユースの振り返り、記録、苗木の経過観察と清掃場所の確認



プロジェクトチームはユースグループのメンバーやプロジェクト参加者との交流や月例講習会の視察、プロジェクト活動、成果に関する質的な振り返りの収集を目的として、デリーのHolambi Kalanへのコミュニティ訪問を実施した。



デリーのHolambi Kalanで行われたアースデイ清掃、植樹活動で、プロジェクトチームは現地のコミュニティのユースと共に15本の苗木の植樹と50 kgから60kg程度のゴミの収集を行った。



Act for Earthキャンペーン実施と創造力コンテストで、プロジェクトチームは路上劇を披露し、4つの創作コンテストを開催し、70人超のコミュニティ住民がそれらの活動に参加した。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

意識の向上と行動の変化

参加者は、気候変動やジェンダー関連問題に関する理解を深め、日々の生活の中で持続可能な習慣を取り入れ始めた。

きれいで緑の多い公共空間

ユース主導で行われた清掃活動、苗木の植樹、ごみ箱の設置により、対象地域の環境が目に見えて改善された。

ユースのリーダーシップ強化とジェンダー的包摂

男の子と女の子、特にユース女性が議論の主導、活動の企画、公的な取り組みへの参加を通してリーダーとしての役割を担った。

コミュニティへの強い影響力と働きかけ

ユースは集会、路上劇、キャンペーンを通して住民に働きかけ、数千人にリーチし、環境活動への幅広いコミュニティの参加を促した。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



直面した課題	得た学び
知識不足 気候変動、ゴミ処理、ジェンダーと気候変動の関連性について当初ほとんど知識がなく、さらに、集会、路上劇、清掃活動等の活動にコミュニティの参加を促すのも困難だった。	文化的に馴染みがありユースが親しみやすい(路上劇、ゲーム、視覚教材等)手法を活用して、概念を身近に感じられるようにすることが、理解の大幅な向上と信頼構築、ユースとコミュニティの参加意欲の向上につながる。
取り組みとスケジュール上の制約 試験、家事、個人的な取り組みにより、ユースが活動できる時間に制約があり、さらに長期的な行動変容に向けて意欲を維持するのが難しかった。	責任を共有し、プレッシャーをあまりかけずにユースを支える、柔軟性のある環境が、ユースの継続的な参加を支える一方で、彼ら自身が持続可能な習慣を自分のものにすることで、長期的な変革の担い手としての力を身につける。
活動実施上の問題 清掃活動やコミュニティ活動で、プロジェクトチームはゴミの処理方法、物資の入手方法、許可の取得等、実施上の問題に直面した。	現地のリーダー、業者、コミュニティ関係者との緊密な連携が、取り組みの円滑な実施につながり、取り組みに対する現地の当事者意識を高める。
注力のバランスがとれた戦略づくり プロジェクトチームは、現場での活動とソーシャルメディア上の活動、そしてオンラインでのアドボカシーのバランスを取るのに困難を覚えた。	オンラインでのアドボカシー活動で認知度を高めることはできるが、オンラインと対面両方の活動を効果的に実施、一体化するには、連携のとれたチームワークと明確な計画が必須である。

今後の計画と拡大可能性

本プロジェクトは今後も、オンラインでの低コストのアドボカシーをユース主導で展開し、活発に連携を取りながら活動を継続していくことで、その勢いを維持していくことができる。チームメンバーはプロジェクトのInstagramページに教育的な内容の投稿や月毎の挑戦、コミュニティの出来事等を掲載して運営し続けるとともに、YES、Rasdhara Theatre Society、現地のユースグループ、YLAの仲間といったネットワークと協働していく。不定期に行われる清掃活動や植林地の訪問、話し合い、創造的な啓発活動とともに定期的にオンラインミーティングを開き、WhatsAppで議論することで人々の参加を維持していく。さらに、プロジェクト期間中に結成された非公式のエコクラブは、学びを共有し小さな活動を共に計画する場として今後も機能し続ける。そして、連携関係の拡大やオンラインでの活動の強化、オンラインと対面両方でユース同士の取り組みを継続することで、継続的な資金提供が行われなくても、ユース主導の気候変動運動に成長していくことが、チームの長期的目標である。

ユース主導の取り組み

Girls Climate Parliament Project



ユースアンバサダー

1. Girish
2. Sonia
3. Divya
4. Yash
5. Mangal



シード助成金プロジェクトの概要

目標とする社会的変化

本プロジェクトは、低所得コミュニティに住む思春期の女の子が日々の生活で感じている(移動制限や熱ストレス等の)ジェンダーや気候不正義を現地の政策に直接つなげ、気候変動領域のリーダーとしての力を身につけることを目指すユース主導の取り組みである。本プロジェクトでは、気候変動教育、リーダーシップ研修、参加型ツールを組み合わせることで、女の子が基本的リテラシー(知識を活用する力)を身につけ、彼女たちが気候変動対策に求める政策を声明Girls' Climate Manifestoとしてまとめ、気候変動に対するレジリエンスや現地の意思決定に関する対話を意義のある形ですすめていく力を発揮できるようにした。



目標

1. 大きなギャップへの対応: 疎外されたコミュニティに属する女の子が代表として気候変動関連議論に参加している割合は5%未満である
2. 思春期の女の子に気候変動に関する知識とアドボカシースキルを習得させる
3. 環境領域でのリーダーシップ能力の構築
4. 女の子が現地に根差した気候変動対策を生み出す場を創出する。単なる教育ではなく、気候変動に関連する対話の変革を目指す

支給された助成金

2,000ドル

対象地域

Chawalkheda村、Jalgaon、Rangpuri Pahadi、南デリー、インド

対象者

本プロジェクトは、Jalgaon(Maharashtra州)の農村部とSouth Delhiの都市部で社会的に困難な状況にある低所得層の思春期の女の子311人が直接参加し、そこには、移動制限を課せられている生徒や家事を抱えながら参加したユース女性も含まれる。

計311人の思春期の女の子がエンパワー(能力強化)された

シード助成金プロジェクトの活動

プロジェクト活動	主な活動内容
導入講習会	気候変動の基礎知識の導入、権利に基づく議論、ストーリーテリングと自信の構築、環境マッピング開始
気候変動、環境とのつながり、自信構築に関する基礎講習会	コミュニティと環境マッピング、簡単なグラフとデータの読み方、気候科学に関する導入活動、生態系に関する課題への取り組み
デリーでのストーリーテリングとアースデイのワークショップ実施	気候変動関連のストーリーテリング、アースデイの誓いと地球への手紙、(市民、行政関係者、環境主義者)役に分かれたロールプレイ、心をつなげる演習
環境データ、グラフ、地図の読み方と、コミュニティ住民へインタビュー調査に関する講習会をデリーで実施	環境に関するグラフ、地図の解釈、コミュニティの年長者へのインタビュー、ロールモデルから学ぶリーダーシップ、ジェンダーと環境に関する考察
演劇とジャーナリズムに基づくコミュニケーション、ワークショップをJalgaonで実施	気候変動やジェンダーの影響に関するワークショップ、アドボカシーのためのストーリーテリング、日々の生活で感じる気候変動問題の特定
Jalgaonでの川沿いのウォーキング、村のマッピング、コミュニティ住民へのインタビューと、デリーでの声明への理解と問題の記録	プロジェクトの進捗状況の共有、村人の反応を収集、他のユースリーダーとの知見の交換、次の開発段階に向けた改善点の洗い出し
2回目のM&E訪問	詳細な問題のマッピング作成、インタビューと資料作成スキルの習得、声明における優先テーマの特定
デリーでの声明の作成、演説準備、模擬議会	女の子の気候変動対策に対する声明の完成、15人超の女の子が演説を準備、リーダーの役割を果たすための訓練の実施、60人超が参加し成功裏に終了した議会イベントの開催、コミュニティリーダーと現場の従事者が参加



プロジェクトチームは、気候変動問題の基礎知識を導入し、現地特有の環境上の問題や強みを把握するために、対象地域であるJalgaonのChawalkheda村と南デリーのRangpuri Pahadiで導入講習会を実施した。



プロジェクトチームは、Jalgaonの Chawalkheda村と南デリーの Rangpuri Pahadiで、気候変動と環境とのつながり、自信構築に関する基礎講習会を実施した。



ワークショップでは、参加者は信頼関係構築活動や安全に表現や協働ができる場の創出に取り組んだ。

シード助成金プロジェクトの具体的成果

リテラシーと個人の主体性の向上

女の子は熱ストレスや洪水等の環境問題を自身の日々の生活や権利と地続きの問題として考えられるようになり、気候変動に関する基礎的なリテラシーを身につけた。その結果、彼女たちの自信と人前で話す能力が目に見えて変化し、行動にもすぐに変化が現われ、今後リーダーシップを発揮したいという強い気持ちが芽生えた。

政策提言とガバナンス(意思決定を適切に行う枠組み)の統合

本プロジェクトにより、知見を意思決定という行動につなげることができ、その成果はエビデンスに基づく声明「Girls' Climate Manifesto」と、現地のリーダーが彼女たちの政策要求を正式に承認する公開議会イベントの開催として実を結んだ。

コミュニティの評価と再現可能なモデル

間接的な形で、保護者、教師、現地のリーダーを含む150人超が積極的に取り組むことで、彼女たちの取り組みの効果が上がると共に、コミュニティの当事者意識が強化され、ユース主導の気候変動教育とガバナンス形態を他のコミュニティにも導入して広げていくモデルを示すことができた。

ユースアンバサダーが直面した課題と得た学び



直面した課題



得た学び



直面した課題	得た学び
気候変動・社会的な制約下でのプログラム設計 (熱波や洪水等の)予測不可能な気候変動による支障が生じる中でも一貫性を保ちながら、女の子が直面している厳しい移動制限、安全上の問題、家庭内の制約を考慮した講習会にすることが求められた。	気候変動対策プロジェクトの成功には、(熱波や洪水等の)予測不可能な気候現象に適応する柔軟性が必要であり、女の子のスケジュール、安全、移動制限にかなり配慮し、一貫性のある公平な参加を保証できなければいけない。
躊躇や概念の複雑さの克服 当初の自信の低さや人前で話すことへの恥ずかしさに対応しつつ、複雑な気候変動やガバナンスの概念を、専門的にならず理解しやすい内容に変える必要があった。	気候リテラシーは、複雑な概念を現地の文脈に根ざした形にして(ストーリーテリングやロールプレイ等の)創造的で参加型の手法で伝えることで、参加者の自信が解き放たれ、スキルの向上につながる。
運営管理と規模拡大 地理的に離れた場所(地方部と都市部)で単一のプロジェクトを管理し、組織的支援が限られた状況下で、コミュニティの賛同と協力を得て連携体制を構築することが求められた。	現地の状況に合わせた手法にすれば、対照的な場所(地方/都市)でも共通のモデルを展開することができる。その展開には、チーム内の強い連携に加え、地方部での動員やイベントの効率的な実施のために、現地の既存の機関の活用が求められる。

今後の計画と拡大可能性

本プロジェクト(GCP)は、学校と保護者の支援による自立型の基盤を構築した。その持続性を維持するための計画には、フォローアップ講習による既存モデルの強化や、女の子の気候変動対策に対する声明をGram Panchayatsと共有し、現地の統治に働きかけることが含まれている。長期的な展望としては、モデルの他の村々への展開・自立的な展開に向けたトレーナー養成講座の開発や外部リソースの積極的な獲得を重点的に行っていく。

主な知見



主な知見

シード助成金プロジェクトの実施から、各対象国に特有の地域的な傾向と喫緊の課題が明らかになった。

国	取り組んだ課題
タイ	気候変動に起因する食料不安。不安定な気象パターンが気候変動により一層激化して農家を直撃しており、それが伝統的な農業を脅かし、現地の食料安全保障が不安定化している。
フィリピン	ゴミ処理システムの不備。問題の中心は、ゴミの分別やリサイクル、安全なゴミの処分が広域で行われていないことであり、それが深刻な環境悪化(土壌、水質汚染)と現地コミュニティの公衆衛生上のリスクを高めている。
インドネシア	気候変動に対する脆弱性とジェンダー不平等の交差性。同国は、甚大化する気象災害と危機的状況にあるゴミ問題に直面しているが、問題は、脆弱な人びと、特に女性とユースが不平等と、意思決定プロセスにほとんど参加できない現実のなかで最も大きなリスクにさらされている点にある。
ベトナム	災害に対する脆弱性と情報格差。喫緊の課題は、(嵐や洪水等の)災害に対する脆弱性の高さに加え、気候変動について、ユースが入手できる、ユース向けの情報と防災リソースの不足である。
インド	都市環境の悪化と社会的排除。この問題には2つの要素が重なり合っている: 1つは、疎外された地域での(不適切なゴミ処理、使い捨てプラスチック、熱ストレスといった)深刻な物理的環境問題、もう1つは、気候ガバナンスに関する議論から、低所得層の女の子とユースが社会的に排除されていることである。

プロジェクト実施に関し、各ユースアンバサダー・チームに共通してみられた課題は以下の通りである。

種類	具体的な問題	プロジェクトの詳細
運営・調整上の問題	遠隔での調整	メンバー間で在住地域、標準時刻、スケジュールが異なるため、会議の日程調整に困難が生じた
	限られたリソース	予算と人員に制限があるため、必要な全資材の調達や、複数地域でのワークショップの同時開催は困難であった
	チーム能力	現状のまま、大きな変化はもたらせなかった

種類	具体的な問題	プロジェクトの詳細
知識と参加意欲の不足	当初の意識の低さ(知識不足)	参加者は、気候変動やジェンダーの関連性、新しい栽培方法の実現可能性、非常用持ち出し袋等の防災ツールの機能など複雑な概念について、ほとんど知識がない場合が多かった
	抵抗と動員	各チームは当初、(ミジンコウキクサの栽培等の)馴染みのない手法に対する抵抗に遭ったり、清掃活動や啓発キャンペーンといったコミュニティ活動への参加をコミュニティに広く促すのに苦労した
外的阻害要因	災害	洪水を引き起こす激しい嵐等の気象現象により、休校や予定されていた行事の延期を強いられた
	社会的制約	ユースの参加は、試験、家事、個人的な用事、特別なニーズを持つ人びとの移動/アクセスに関する問題等の外的要因によって制限されることがあった。

ユースアンバサダーのプロジェクト全体に見られた傾向を踏まえ、以下の教訓が共通して得られた。

種類	主な教訓	プロジェクト実施戦略
コミュニティとの真の関係構築	まずコミュニティの声を聴く	現地の意見と不安に耳を傾けることがコミュニティと真の関係を築く第一歩であり、それによって信頼が生まれ参加は有意義で持続可能なものになる
	わかりやすい形で伝える	気候リテラシーは、複雑な概念を地域の文脈に落とし込んで、平易な言葉と対話型のカードゲームや路上劇(nukkad nataks)、役割演劇といった、創造的な参加型手法で伝えることが、最も効果的な習得につながる
適応型コミュニケーション・運営	柔軟性が鍵	柔軟性と高度なコミュニケーション能力は、効果的なチームワークに必須であり、災害やチーム再編成等の想定外の事態に計画を適応させる上できわめて重要である
	コミュニケーション手段の多様化	多様なコミュニケーション手段を活用して一貫した連携をとることが、参加者の信頼を維持し、翻訳サポートで言葉の壁を克服し、一歩一歩確実に前進することにつながる
豊富なアイデアと現地での連携	制約から生まれる革新	リソースの不足が、革新のきっかけとなることがある。事前計画と緊急時用の資金の確保がきわめて重要であり、持続可能性は多くの場合、現地で入手可能なものから生まれる
	パートナーの活用	現地リーダー、業者、コミュニティの関係者、LGUとの緊密な連携は、より円滑な実施と支援や許可の獲得、さらに長期的な持続可能性を組み込んだ制度の実現に必須である

ユースアンバサダーがシード助成金プロジェクトの目標を達成できるよう、YLAはどのように支援したか

プラン・インターナショナルのYLA調整者とメンターは、包括的で継続的な支援を提供し、シード助成金プロジェクトの成功になくてはならない存在だった。彼らの支援は、プロジェクト実施や計画、個人の成長にまで及んだ。メンターは有益な助言を提供して活動計画や調査ツールを練る助けを行い、プロジェクトがジェンダーの視点と包摂性の原則に必ず沿うよう促した。また彼らは、パートナーとの連携、講演者の確保、チームミーティングの調整、ソーシャルメディア活動等をサポートして運営上も重要な役割を果たした。特に、多くの場合個別面談を通して彼らを一貫して励まし、意欲を保ち、心の支えとなることで、ユースアンバサダーの自信を高め、問題解決の力となり、プロジェクトに対する責任感と当事者意識を育んだことは、きわめて重要だった。



「彼らはプロジェクト全体のほぼあらゆる面で私たちを助けてくれて、指導や活動の支援だけでなく、心の支えになってくれました」

Jonna、フィリピン



「彼らは、常に指導、リソース、シード助成金、メンタリング、やる気を与えてくれ、困難な場面でも彼らが与えてくれた意見と励ましは、私たちの自信を高め、進むべき方向を示してくれました」

Honey、タイ



「彼らはプロジェクトを通して私たちに励ましと指導して、支えてくれました。また彼らが、計画通りに進捗できるよう促し、NGO、学校、現地のグループとつながる手助けをしてくれたおかげで、プロジェクトをより円滑にすすめることができました」

Abdi、インドネシア



「メンター制度のおかげで、私たちはリーダーシップ能力を高め、困難な状況下でもやる気を維持し、プロジェクトがジェンダーの視点を失わず影響力を持ち続けるようにすることができました」

Deepti、インド



「メンターは私たちにプロジェクトを自由に展開する余地を与えつつ、素晴らしい指導も行ってくれました」

Gita、インドネシア



「彼らはプロジェクトの立ち上げから子どもたちへの参加の呼びかけ、さらに、講習会が必ず時間通り円滑に実施されるようにすることまで、あらゆる段階で私たちを支援してくれました。私たちが助言や指導を求めたときはいつも快くサポートしてくれました」

Bas、タイ

結論と提言



結論



YLAプログラムは、気候やジェンダー正義に取り組む次世代のリーダーの飛躍の場としてきわめて重要なことが証明された。ユースアンバサダーの自己評価結果は、同プログラムが、多様なユースアンバサダー40人に変革を推進するために不可欠なスキルを習得させ、彼らの情熱とそれを実行する現実との間にあるギャップを見事に埋めたことを裏付けている。

だが今回の結果から、プログラムがもたらす社会的変化を最大化するには、特に公平性、運営効率、継続的なアドボカシーについていくつか改善すべき重要な部分があることが明らかになった。

主な学びと成果



中核的スキルへの好ましい影響

参加者のアドボカシー活動やコミュニティでの講演イベントへの取り組みが示すように、本プログラムは、リーダーシップ、広報、語りを用いて働きかけるスキルの開発という目標を達成した。



プログラム実施上の課題

各国毎の政治的/環境的文脈の相違、柔軟な実施スケジュール、外部との約束事項の遵守、リソース、コミュニケーション問題(言語やアクセント)等の運用上の問題は、今後標準化を進めながら適応性のあるプログラム体制にしていく必要性があることを示している。



仲間との協働の力

仲間同士での学びの重要性は繰り返し取り上げられ、その実施には困難が伴うとは言え国境を越えた協働の重要性がきわめて高いことを示唆している。



アドボカシーと公平性における課題

本報告書は、プログラム外でのアドボカシーは期待したほど活発に行われず、参加者のこれまでのアドボカシー、プロジェクト管理等の経験に明確な格差があったためにメンター制度やワークショップの効果に差が生じたと指摘している。この問題には、カリキュラムと参加者の選出について、個々の状況に合わせた手法をとる形で対応する必要がある。



提言

YLAが今後も実施を重ね、持続可能性を保ちながら最大の社会的変化をもたらすためにとるべき戦略的行動を、対象別の提言として以下に示す。

プラン・インターナショナル

1. 採用とプロジェクト構造

- **洞察:** このプログラムは、参加者が留学中、あるいは海外で生活している場合、対面型のプロジェクトへの参加が難しいという運営上の課題に直面した。また、単一国を対象としたプロジェクトであったため、多様性や学びの共有の点で可能性が制限された。
- **提言:** 国内実施を優先し、異文化間協力を求めていく。今後も継続的に実施する際は、自国に居住する応募者を優先し、しっかりと参加できる体制にするべきである。またイノベーションをすすめるためには、単一国での実施から国をまたいだ共同プロジェクトへ移行すべきである。
- **例:** 例えば、ベトナムのチームがインドのチームと提携して(河川汚染等の)共通の問題に取り組まなくてはならない「地域課題」コースを設け、現地で実施する際に参加者に国境を越えた協力を求める。





2. カリキュラムの公平性

- **洞察:** 参加者のそれまでの経験値に明確な差がみられた。39%が本格的なプロジェクト管理経験は初めてだった一方で、残りの参加者の経験値は高く、ワークショップの効果に差が生じた。
- **提言:** 参加者のベースラインの調整。参加者全員が同等の条件で開始できるよう、より厳格な選出基準の設定、または準備段階を設置する。
- **例:** 専門領域での英語とプロジェクト管理の基本用語を網羅した「YLA適性試験」を必須試験として導入する。その試験の「レベル0」を合格した者だけがYLAに参加できる。

3. メンター制度と学習環境

- **洞察:** それまでの経験値が低い参加者が自信をつけるためには、より多くのサポートを行う必要があった。また、参加者が平等にテクノロジーを利用できない環境や、オンライン形式のみでの実施形式によって、学習過程が妨げられることもあった。
- **提言:** メンター制度の強化と学習過程の改善。参加者の自信を向上するため、平等性と協力を重視したメンタリングが行える正式な制度を整える。それと同時に、オンラインと対面の活動を組み合わせて、参加できる形を最大限に広げ、参加者全員が共通した機器(ノートパソコンやタブレット)を利用できるようにする。
- **例:** 経験値の低い者をサポートするため、メンターを対象とした「自信育成のためのコーチング」手法の訓練を実施する。加えて、プログラム開始時に参加者全員に「デジタル包摂キット」(タブレット + データー式)を配布し、オンライン講習会中に取り残される者がいない環境をつくる。

4. 子ども・ユースのセーフガーディングと同世代の仲間同士の学習

- **洞察:** 参加者は、仲間同士の学習が本プログラムの目玉だと強調したが、現状のやり方では自由なネットワークづくりは難しいと指摘した。しかし、私たちと資金提供者にとって最優先事項は、セクシュアル・ハラスメント、搾取、虐待の危険性を完全に排除した環境の維持である。
- **提言:** 「監督下での協働」の実現に向けたセーフガーディングの向上。安全基準の緩和ではなく、安全な環境下でのつながりを可能にするインフラへの投資。「接触の制限」から、公式の経路を通じて「安全につながれる環境づくり」へ移行する。
- **例:** ワークショップ以外でのオンライン上のつながりを禁止する代わりに、モニターされているMicrosoft Teamsチャンネルや Discordサーバー等のYLAが管理する公式プラットフォームを設ける。そこでは、公式のセーフガーディング担当者がやり取りを監視するため、ユースが監督されていない危険性の高いプライベート用のSNSアプリに頼ることなく、プロジェクトに関した自由な協働が可能となる。

ユース

1. エビデンスに基づくアドボカシー

- **洞察:** プロジェクトとして最も成功を収めたのは、毎月確実に35kgのゴミ削減を達成したインドネシアのSAFEプロジェクト等、具体的な数値で成果を確認できるものだった。
- **提言:** 働きかけのためにデータを記録する。単なる意識喚起にとどまらず、データを活用して活動の価値を証明すること。政策決定者や資金提供者を動かすのは単なる熱意ではなく、エビデンスである。
- **例:** 「ワークショップを成功裏に開催した」という報告ではなく、SAFEチームが示したように、「事前・事後テストの結果データによると、250人の生徒の気候リテラシーを95%向上させることができた」と報告する。

3. ユースの声の存在感を高める

- **洞察:** 世界規模の気候変動フォーラムへのユースの参加を求める声は高く、大きな影響を与えるアドボカシーには、実際にその場にいることがきわめて重要である。だが、ユースの参加人数には割り当てによる制限がある場合が多い。
- **提言:** 対面で行うアドボカシーに参加できる人数の枠を広げる。選抜されたユースアンバサダーが、地域規模や世界規模の気候変動フォーラムに対面で参加できる人数を増やすために財源を増やす。
- **例:** APMCDRRやAsiaXchange等の地域イベントにユース世代を最低50%は送り込めるよう、特定の旅費助成金を計上して、意思決定の場で彼らが声を上げられるようにする。



2. 現地に即したアドボカシー

- **洞察:** プロジェクトとして最も効果的だったのは、世界規模の抽象的な概念を現地の現実に落とし込んだものだった。タイの「Green Caviar」チームが、気候変動対策を単に「地球を救うこと」ではなく、不安定な気候に直面している農家の経済的機会として位置付けて成功を収めたのは、その一例である。同様に、インドの「GCP」は、気候変動を水へのアクセスや安全といった日々の問題と結びつけた。
- **提言:** 世界規模の概念を現地の文脈に落とし込む。国際的なスローガンを単に繰り返すだけではいけない。効果的にするには、世界規模の気候変動に関する概念を、現地のニーズと優先事項、そして住民とリーダーの具体的な言葉に「変える」必要がある。
- **例:** 現地の村長と話す際は、「世界のネット・ゼロ(人為的温室効果ガス排出量を実質ゼロにする)」を語るのではなく、Green Caviarチームが行ったように、「降雨パターンの変化が、私たちの村の米の収穫量をいかに減少させているか」について話す。

資金提供者

1. ユース主導の仕組みへの投資

- **洞察:** シード助成金プロジェクトを通して、ユースチームが資金(2,000ドル)を適切に管理し、複雑な業務を遂行し、具体的な成果を出せることが実証された。
- **提言:** 「プロジェクトベース」の資金提供から「組織ベース」の資金提供に転換する。実績を示したユースグループが、一時的なプロジェクトチームからユース主導の恒久的な組織へと発展できるよう、それらの持続可能性に投資する。
- **例:** 今後、資金提供を継続して行う際は、特に高い実績を示したYLA卒業生チームを対象に助成金を増額して(5,000ドルから1万ドル程度)提供する「さらなる展開手段」を設け、彼らの取り組みを正式なNGO・社会的企業として法的に登録できるよう、登録料や初年度の運営費の負担を含む資金提供を行う。

政策立案者

1. ユースの声を組み込んだ制度をつくる

- **洞察:** ユースの参加は、(意思決定を適切に行う)ガバナンスの枠組みに組み込むというより、サミットでの象徴的な参加にとどまる場合が多い。
- **提言:** ユースの代表を制度として定着させる。気候ガバナンスの枠組みにおけるユースの役割を定め、単なる協議参加から共同意思決定を行う存在に移行する。
- **例:** 気候変動政策の可決前に、その内容の検討・助言を行う立法上の権限を持つ恒久的なユース気候評議会を設置すること。

2. 戦略的資金配分(国家基金)

- **洞察:** アジア太平洋地域の人口の50%をユースが占めているにも関わらず、世界の気候ファイナンスの内、ユース主導の取り組みに充てられているのは1%未満である。YLAシード助成金プロジェクトは、直接的な資金提供が、経済・環境面で実質的な成果をもたらすことを実証した。
- **提言:** 各国の気候基金でのユースへの配分を義務付ける。各国政府は形式的な支援を越えて、ユース主導の取り組みが国の気候基金の一定割合を直接利用できるよう法律化する必要がある。
- **例:**「国の気候資金の最低20%を、ユース主導の取り組みに配分」し、大規模なNGOに通常求められるような財務上の煩雑な手続きの要らない簡素化された仕組みを整える。



Appendix



I. Photo Credits

All photographs and visual materials featured in this report have been sourced and owned by Plan International's and YLA program.

II. List of Social Media

Social media campaign reach measurement includes the official website and all Plan International social media accounts in participating countries.

Plan International

Youth Action Platform: youthactionplatform.org

Plan International Indonesia

- LinkedIn: Plan Indonesia
- Instagram: @planindonesia
- Facebook: Plan Indonesia
- X (Twitter): @PlanIndonesia
- YouTube: Plan Indonesia Official

Plan International Philippines

- Facebook: Plan International Philippines
- Instagram: @planphilippines
- YouTube: Plan Philippines

Plan International India

- X (Twitter): @Plan_India
- Instagram: @planindia
- Facebook: Plan India
- LinkedIn: Plan India

Plan International Vietnam

- LinkedIn: Plan International Vietnam
- Facebook: Plan International Vietnam

Plan International Thailand

- Instagram: @planthailand
- YouTube: Plan Thailand
- LinkedIn: Plan International Thailand
- Facebook: Plan Thailand

Plan International Asia-Pacific

- LinkedIn: Plan International Asia-Pacific
- Facebook: Plan International Asia-Pacific
- X (Twitter): @PlanAsiaPacific
- Instagram: @planasiapacific

III. List of Partners

This is the list of partners that helped YLA to outreach the youth, ensuring the program's message reached diverse and passionate candidates across the region.

Climate & Green Communities

1. Climate Rangers Jakarta
2. Economy For Ecology
3. Teens Go Green Indonesia
4. Bumiterra Restoration & Carbon Services
5. Ruang Iklim
6. Climate Reality Indonesia
7. Environmental Proactive Youth Community Indonesia
8. Moksamerta
9. Greeneighbour Indonesia
10. Untuk Bhumi
11. Bye Bye Plastic Bags
12. Enter Nusantara (Energi Terbarukan untuk Nusantara)
13. Cerita Iklim
14. Aku Juga Terdampak
15. Saling (Sahabat Lingkungan)
16. Society Renewable Energy Women
17. Green Welfare by Yayasan Kesejahteraan Hijau Indonesia
18. Youth in Sustainability
19. Environmental Law Society FH UI
20. Plan International Social Media Platform: Facebook and Instagram

Government Body or Agency

1. Badan Meteorologi, Klimatologi, dan Geofisika (BMKG)
2. Seknas SPAB (Satuan Pendidikan Aman Bencana) Kemenristekdikbud
3. Direktorat API (Adaptasi Perubahan Iklim) Kementerian Lingkungan Hidup dan Kehutanan RI

Universities & Student Executive Boards

1. BEM Universitas Bengkulu
2. BEM Universitas Sriwijaya
3. BEM Universitas Riau
4. BEM Universitas Andalas
5. BEM Universitas Udayana
6. BEM Universitas Mulawarman
7. BEM Universitas Lampung
8. BEM Fakultas Hukum UI
9. Lembaga Eksekutif Mahasiswa Fakultas Kehutanan UGM
10. Chiang Rai Rajabhat University (CRRU)
11. Mae Fah Luang University (MFU)
12. Prince of Songkla University, Pattani Campus (PSU)
13. Pusat Studi Bencana (PSBA) UGM

Youth-led Organizations

1. Youngsters Peace
2. Girl Up UGM
3. Sa Perempuan Papua
4. pése
5. Pikul Kupang
6. Yayasan Pemuda Setara Idn
7. Solidaritas Perempuan Kinasih
8. SP Palembang
9. SP Sumbawa
10. SP Palu
11. AYIP (Advocates and Young Innovators in the Province of Occidental Mindoro)
12. Youth Connect (Y20)
13. Scholarship for Vietnamese students/Hannah Ed
14. IVolunteer Vietnam
15. YBOX
16. Kênh thông tin Đoàn Ngoại giao
17. UNICEF
18. Plan India's social media handles
19. Groups of Plan Sponsorship Programs (all states)
20. OVOC platform Thailand
21. Young Health Program Thailand

謝辞

YLA成果報告書は、持続的な社会的変化を生み出すチェンジメーカーを支援するDIFIとの協力のもと、プラン・インターナショナル アジア太平洋地域事務局が、インドネシア、インド、フィリピン、ベトナム、タイの各国事務所とともに入念に作成したものである。

DIFIについて:

DIFIは、現地コミュニティやその環境の中に意義ある変化を推進することに重点を置き、より良い未来に向けた(各組織の)変革力を高めるエンパワーメントに取り組んでいる。

インパクトをもたらすコンサルティング

データに基づくDIFIの知見を活用し、設定された目標を超えて持続的な成長を促す効果的な戦略を策定する。

インパクト測定

DIFIとの連携により、有意義な成果と透明性を伴う、社会的・環境的変化の効果的な測定が可能となる。

インパクトをもたらすワークショップ

持続的な変革の芽となる現場での生きた学びを通して、組織内により良い未来に向けた変革の文化を育む。

インパクトレポート

ステークホルダーの共感を呼び行動を促す、有意義で意欲をかき立てるサスティナブル・ストーリー(活動事例)を紡ぐ。

すべての人にとって、より明るく持続可能性の高い未来を共に築いていきましょう!





Supported by

